
場版とある魔術の禁書目録～戦いの神と呼ばれた者～ × 時間を渡る電王《王玉、それは絆の石

桐生 乱桐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

劇場版とある魔術の禁書目録〜戦いの神と呼ばれた者〜×時間を渡る電王《王玉》、それは絆の石《

【Nコード】

N0772X

【作者名】

桐生 乱桐

【あらすじ】

鏡祢アラタと皇海音スメラガイト

上条当麻と綾崎ハヤテ

四人の道筋が重なる時、物語は始まる

P r o l o g t o t h e I N D E X

「王玉？」

その日、俺は蒼崎橙子の事務所に来ていた

「ああ。場所はわからないが、なにやらヤバげな匂いが漂っている。お前はその王玉を発見し入手、可能であれば破壊して欲しい」

破壊、という単語が橙子の口から出るとは意外だ

「…そんなにヤバいのか、アンタなら自分の持ち物として懐に入れそうなのに」

「ヤバいものとヤバくないものの区別くらいつくさ。…王玉は、世界を終わらせる力を秘めている」

世界を、「終わらせる」？

「…どういう事だ？」

「行けばわかるさ。…幸いにも、イギリス淒教から、旅行勧誘の手紙が届いてる」

「旅行？」

「イギリス淒教から旅行に行かないかと誘いが来てね、恐らく上条当麻とかにも行っていると思うのだが」

イギリス淒教からそんな誘いが来るとは知らなかった

「…けどなんで俺にそんな事頼むんだ。アンタなら自分で行ってどうにかできるだろ」

「あいにくと仕事が入ってしまったてな。私は旅行に行けない。だからお前に頼んだのさ」

仕事、ねえ

「ホントに仕事か？ どうもきな臭いな」

「失礼だなお前は。私は人形師だ。まあ、建設の設計もしているが。今回は設計の仕事が多々来てな。早いとこ終わらせたい」

そう言うとき橙子は机の引き出しから数十枚の紙を取り出してバサッと机の上に叩き付ける

どうやら仕事というのは本当らしい

「まあ了解。んじゃ俺は準備するために寮に戻る」

「ああ、頼むぞアラタ。世界の命運は、お前にかかっている」

「んな大袈裟な…」

その頃はまだ笑い飛ばしていたが、後にそれに匹敵する状況に遭遇するとは思ってもいなかった

……………

そもそもなぜイギリス凄教が旅行の招待状を上条当麻や鏡祢アラタに送ったのか

まずはそこから話さねばいけない

それは完全にコイツの気まぐれだ

「旅行に行きたい事よ、クロス」

「…は？」

一体何を言い出すんだコイツは

「いやー、何やら神裂のヤツが、オン・ガエーシなるものに四苦八苦しるところにつき、ちょっとキツカケでも作ってやろうと一肌脱ぐう事にしていのよ」

「自分が旅行行きたいだけじゃないのか？ ローラがそんな事言うのはなんか企んでる気がするし」

「失礼けりね、クロス。今回は純粹に好意を込めりね…」

「…まあ、わかった。とりあえず誘ってみようかね」

そんなローラの一言で、クロスの招待状渡しが始まった

なんとローラの直筆だ

なんか魔術でも込めているのかと軽く調べたが何もなかった

…本当に純粹なのか

ちよつとローラを見直した

ただ海外である学園都市には普通に宅配を頼んだ

んで

………

「にわかには信じられませぬ。あの「^{アークヒショップ}最大主教」がそんな事を提案するなんて」

言つてステイルはテーブルに置かれた紅茶を啜る

ここはイギリスでもそれなりに名のあるオープンカフェ

シンプルな紅茶はなかなかだ

屋外に設置されており、パラソルをかけてあるそのテーブルは何かと目を惹かれる

「んで、ステイルはどうすんの。行くの？ 行かないの？」

「そうですね。…ここ最近は暇ですし、せつかく「^{アークヒショップ}最大主教」がこんな事を用意してくれたんだから、乗らないと損かな」

「了解、参加決定な」

俺は懷から招待状を取り出しステイルに渡すと次の目的地に赴いた

……

「アーキビショップ「最大主教」がこんな事を？」

次にやってきたのはイギリス凄教女子寮

話をしているのはこの女子寮に住んでいる神裂火織だ

「ですが、唐突過ぎて意味がわかりません。それにあの女狐の事です、裏で何か企んでるに違いありません」

「いや…、それは俺も考えたんだけど…」

俺は頬をポリポリと書きながら

「けど学園都市にも招待状送っちゃったし？ 上条当麻に恩返しするチャンスだと思うぜ？」

「恩返し」という単語を聞いた神裂のこめかみがピクリと動く

「…、」

「まあそっちにも都合があると思うし、まあ無理にとは——」

「行きましょう」

「…は？」

「その旅行に行くと言ったのです。アラストル、招待状を」

神裂火織の参戦が決定しました

.....

「行きます!!」

天草式十字凄教の本拠地に行ったところ、教皇代理の建宮を押しつけて五和が飛び出してきた

「お、おう、じゃ、荷造りしといってくれな」

「はい!」

超満面笑顔の五和

...ま、まあ問題ないだろうさ

「建宮、お前もいろいろ大変だな」

「...お察しいただけて嬉しいのよ」

災難な建宮に合掌し、俺はその場を後にした

.....

所変わって学生寮

「当麻ー、入るぞー」

ガチャリ、とドアを開け当麻の部屋に入る

「お、アラタ。お前の所にも来たのか？ この招待状」

「という事は、お前も？」

言われた当麻は二枚の招待状を見せる

「…なるほど、コイツは本物だ」

「いきなりでビックリだけど…もしかして、これってマジなのか？」

おずおずといった様子でそんな事を聞いてくる

「マジだな。久々の海外だ。たまには楽しんで行こうぜ」

「…、」

なんだか当麻が震えている

数秒ぶるぶるしていたと思った矢先

「やったあああああ！！」

叫んだ

「ちょ、どうした当麻」

「いや、俺さ、こういう旅行ものにちょっとトラウマあるからさ…、
純粹な旅行って久しぶりなんだよー」

嬉々として立ち上がり荷を作り始める当麻

「なにになにとつまー、どうしたのー」

そんな様子が気になったのか三毛猫スラインクスを抱えて当麻の元に歩み寄るインデックス

「…旅行、か」

これから何が起こるのかはまだわからない

だが、楽しい旅になる事には違いない

そう思いを馳せて、当麻の荷造りする様を見守った

P r o l o g T o t h e H A Y A T E N O G O T O K U ! (前書き)

もついろいろ申し訳ないですm(_____)m

後書きにイメージOP主題歌を書きます

題名だけですけれど…

Prolog To the HAYATENOGOTOKU!

「では、よい旅を」

そう言つて受付の人は僕にパスポートを手渡した

僕はそれを頂いて大切に懐にしまう

「僕、成田空港に来たの初めてですよ」

「ほう。じゃあ飛行機に乗るのも初めてなのか？」

「はい、初めてですお嬢さま」

この4ヶ月、様々、かつ激動な体験をしてきた僕にとって、「飛行機に乗る」なんて一大イベントを体験出来るなんて思いもしなかった

それもこれも、お嬢さまのおかげだ

「そっかー…、なら初めての海外なら暖かい南の島にすれば良かったな」

「そんな。ものすごく楽しみですよ、地中海の島だなんて」

そつ他愛ない会話を交わすお嬢さまの表情がいつもと違いイキイキしてるのがよくわかる

私生活が…、その、「アレ」なので普段はダラッとしていますが

「ハヤテ」

「は、はい！ 何でしょうかお嬢さま」

「今一瞬不愉快な地の文が見えた気がするが。気のせいだよな」

「もちろんですよお嬢さま。空耳です」

キヨロキヨロと辺りを見回すお嬢さまはムスツとした顔だったかがや
がて落ち着きを取り戻し

「…ま、何にせよ」

お嬢さまは飛行機に見える位置に移動すると空を見て

「楽しい旅になるといいな」

純粹な笑顔でそんな事を言った

その一言に付近にいたマリアさんも笑顔で返し

僕もこれから始まる旅に心を踊らせるのだった

.....

綾崎ハヤテと三千院ナギ

この二人が主従となつてからまだ四ヶ月

始まりはハヤテはナギを誘拐し身の代金をせしめようとふんでいた

のだ

こう言うともまるで悪人だがハヤテにもやむにやまれぬ海より深い事情があった

綾崎ハヤテの両親はどんなに頑張つてせいっぱい超好意的に表現しても「ろくでなしのクズ野郎」だ

無職の癖にギャンブル好きで借金を繰り返し、あまつさえハヤテが稼いだアルバイト代さえかつさつて利子の返済にあてるありさまあげくに積もり積もつた借金総額一億五千六百八十万四千円

これを息子であるハヤテにそっくりそのまま押しつけて行方知れずとなった

ハヤテは生まれてこの方ずっと心正しく生きてきた

貧しくても苦しくてもいつか報われる

そう信じて生活してきた

が、その時ばかりは心が折れた

『結局世の中ズルい奴が勝つんだ、真面目に頑張ったとしても手に入るものなんてないんだ』

そう思つても無理はない

時はクリスマスイブの夜

たまたま公園で見かけた小さな女の子をさらって家族から大金をせしめようと画策した

その女の子が三千院ナギその人だ

だがこの計画は未遂となった

本物の誘拐犯がハヤテより先にナギを誘拐したからだ

ハヤテは誘拐犯の車に自転車で追いつくという常人には到底不可能な離れ業を披露し、ナギを救出

それを恩義を感じたナギは行く宛てないハヤテに執事として屋敷に雇用することにした

これが主、三千院ナギと執事、綾崎ハヤテの出会いだった

三千院ナギは世界融通の財閥系グループ総帥のご令嬢で、ハヤテの約一億五千万の借金を現金一括で肩代わりし、ハヤテはナギに仕えながら四十年かけてこれを返済してく運びとなった

しかしハヤテはこの生活を苦に思った事はない

肉親に裏切られ、全てを失ったハヤテにとって『ここにいていい』と言ってくれた三千院ナギは大切な恩人で、役に立てる事はこの上ない喜びなのだ

余談だが仕えるようになった時、ナギがヒキコモリクイーンでゲームオタクである事を知って驚くのだが、またそれは別の話

また、かつてハヤテがナギをさらおうとした際の会話に「ある誤解」が生じているのだが、これに触れるならまたいずれとしよう

.....

一方その頃千桜自宅、その自室にて

「皆今頃海外かー」

春風千桜は椅子に腰掛け、窓の外に映える大空を眺めていた

「お金持ちはいいな余裕があつて...」

「千桜さん？」

後ろから声をかけられて千桜は振り向いた

そこにいたのは皇海音^{カイト}という少年だ

中性的な顔立ちで、耳元で切り揃えられた髪は見ようには女の子にも見られるだろう

「どうしたの？ 黄昏て」

「いや、何でもない。それより買った新巻を読もう」

そう言つて千桜は机に置いてある紙袋から数冊の文庫本を取り出した

それは数日前に発売された新巻だ

千桜は椅子から立ち上がるとベッドにぽふと壁に背を預けながら座って、その隣に海音も座った

これが二人の日常

最初は千桜が既に購入した文庫本を海音を一冊ずつ海音が読んでいたのだが、学校に行っていない（ちよくちよく遊びには行ってる）内に殆ど読破してしまったのだ

それで経費を抑える為に二人で一冊を読もう、という事になったのだ

無論最初千桜は物凄く恥ずかしかった

すぐ横に海音の顔があるのだから

だが何時の間にか慣れてしまった

慣れてしまったのは単純に千桜が彼にある感情を抱いたのと、彼女の心境が変化した事にあるのだが

「それにしても海外かー」

「千桜さんそればかりだね。行きたいの？」

「そりゃあね。けど我が家にそんなお金は——」

「行こうか？」

「…へ？」

彼の存在が

「行ってくて…、どこに？」

「愛歌さんや、皆がいます」と

本来参戦しなかった少女をいざなっていく…

P r o l o g T o t h e H A Y A T E N O G O T O K U ! (後書き)

OP主題歌

『N o b u t s !』

川田まみ

出典『とある魔術の禁書目録?』

チャプター1（前書き）

三者三様な機内の様子

チャプター1

飛行機というものには明確な格差がある

まず一番安いエコノミーなら三万円の席があり、ビジネスはその約五倍の十五万円

ファーストクラスなら同じ場所に行くだけでもそのビジネスの倍の三十万円にもなる

ではそんな格差社会の中、上条当麻らは…

「とうま！　とうま！　なんだかいろいろすごいよ！」

「はいはい、わかったからあんまハシャぐなインデックス」

内側から外の景色を見てハシャぐインデックスにそれをたしなめる当麻

「けど、テンションも上がるよなこんな状況じゃ」

なんだかんだで時たまインデックスと一緒にあって外の風景を眺めている姿を見ると当麻も楽しいのだろう

そんな状況の中俺は…

「飛行機かー…、これでアラタと二人きりならロマンチックなんだけどなー」

隣に座っている恋人、御坂美琴はそう愚痴る

「愚痴んないでくれ美琴。とりあえず、学園都市で待ってる黒子たち土産考えないと…」

学園都市では現在佐天や初春、黒子がお留守番している

「気が早いわよ、アラタ」

「そうそう、最初の内は、このバカンスをどう楽しむか考えないと」
そう言っただけで頭を出したのは、後ろの席に座っている伊達明さんと

「いやー、海外なんて初めてだー…ふふふ」
気味悪い笑みを浮かべたのは神那賀零だ

「こらバカアラタ！ 気味悪いってなによ、くら！ 聞こえてるの！」

なんだかワーワー言ってるが、気にしない

「気にしろー！」

「そついや伊達さんはなんているんです？ 伊達さんには招待状態じゃないって話ですけど」

「子供らだけの旅行なんて、おじさん許しませんよ。だから——」

伊達さんは一拍間を置き高らかに言う

「実費で来た」

「…うわーお」

なんたる人だ

いや、この人ならやりかねん

「紅司さんと咲良ちゃんは？」

「俺の後ろの席さ。初めてだから、窓の外に釘付けよ」ぴ、と親指で後ろを指す

立ち上がって指した方向を見ると目をキラキラさせた紅司さんと咲良ちゃんの姿があった

「…なんだかんだで、楽しみなんだな」

少しだけ、イギリス淒教に感謝した

上条当麻とインデックスの席から後ろへ一つ離れた席

そこには天草式十字淒教の五和と現教皇代理である建宮齊字が座つ

ていた

「なんで建宮さんと一緒なんですか…」

「そんな文句言われても困るのよ…」

不満たらたかな五和を宥めるのはもう嫌なのよ

口には出さず建宮は心の中で呟いた

「けど、なかなか皆で旅行なんてないですよね？」

「それもそうよな…、どという風の吹き回しだ？」

ふとそんな疑問を口にする

最大主^{アイクビショップ}教とはあまり親しくはないのだが…

「ま、深く考えるのは止めましょう。束の間の休暇と考えれば」

「休暇にしては規模が大きい気がするのよな…」

同飛行機に同乗しているステイルと神裂は後ろからその光景を眺めていた

「全く…。浮かれすぎといふかなんというか」

「浮かれてしまう事情もわかります。何人かは、外国も初めてのよ

うですし」

「やれやれ……」

言いながらステイルは何気なく懷にしまつてあるタバコへと手を伸ばす、が

「ステイル、機内は全面禁煙ですよ。それは貴方でも例外ではありません」

言われたステイルはぴく、と手を止めてやがて懷から手をのける

数秒、間をあけて再びステイルは懷に手を伸ばしガサガサと何かを探す

「ステイル、だからタバコは……」

取り出したのは見た目こそタバコの箱だが材料は木だ

ステイルはそこから何かを取り出すとそれを口に放りガムみたいに噛み締めた

「……。ステイル、何ですそれは」

「噛みタバコだ」

「……私は貴方とそれなりの付き合いですが、時折貴方がわからなくなつてきます」

「わかつてないな神裂。ニコチンとタールのない世界の名前は地獄という。そして僕のように善良で敬虔な仔羊は地獄に落ちるような

事はあつてはならないんだ」

なんだそれは、と神裂は内心溜め息を漏らす

しかしそれがステイルだ、と勝手に納得し、旧友の行動を追求するのを止めた

「…にしても、噛みタバコなんてあんのかよ」

二人の後ろの席から声が聞こえてきた

二人は首だけ後ろにやってその人物を確認する

と言つてもその人物は二人の知人だ

「入手は容易だよ。普通に売っている場合もあるしね」

「齊堵、貴方もそれなりに満喫しているようですね」

白いYシャツに青ジーンズとめっちゃめっちゃラフな格好をしている男性は名を霧島齊堵きりしま さいとという

以前学園都市にちよくちよく姿を現していたが、突如姿を消した謎の人物

その正体は「必要悪の教会」ネセサリウスに属する魔術師で、仮面ライダーオーズでもある

ちなみに、劇場版で、超電磁砲編以来久しぶりの登場である

「なんだ不愉快なナレーション」

齊堵はそれを聞き流すことにした

「まあはつきり言つて誰も覚えてないだろうね」

「そうですね」

「そこ。同意するな」

話を戻す

「ステイル、齊堵。此度の最大主教アークヒショッフの行動、どう思います」

「あの女狐の考えていることが、僕たちにわかるとでも？」

ステイルは憎々しげに舌を打つと最初に噛んだ噛みタバコを紙に吐き出すと二個目の噛みタバコを口に含む

「全くだ。アイツの考えははつきり言つて理解不能だよ、ホントに」

同じく憎々しげに嫌みを口にすると読んでいた雑誌をめくる

この答えはなんとなくわかっていた

アークヒショッフ
最大主教

彼女の考えていることはわからない

時に自分たちを欺き騙したり時に協力的だったり

「…ワケのわからない女です…」

神裂は一言言うと、鞆の中から本を取り出すとペラペラと捲り読み始める

場所は変わって三千院ナギお嬢様たちの移動風景

現在三千院ナギお嬢様は「自家用ジャンボジェット機」でゆうゆうと移動してました

「…、」

我らが庶民代表、綾崎ハヤテはそんな機内で呆然とするしかないのだった

「いや、なんかもおすごすぎて声も出ませんね」

「何がだよ」

ハヤテの疑問にナギはごく当然に答える

「これならミコノスの空港に直接乗り入れられるから便利なんだよ」

「どんだけ金積みめばそんな事が許されるんですか…」

まさしくそれは金持ちの特権、お嬢様の成せる荒技だ

しかしそれにはちゃんとした理由がある

「普通の飛行機に乗るのは気が引けるんだよ」

「誘拐とか、ハイジャックとか。他の人を巻き込むかもしれませんし…」

ナギの言葉の続きを紅茶を乗せたお皿を持ったマリアが引き継ぐ
なるほど、とハヤテは納得した

確かに一般の飛行機に乗って目的地に行くのも良いかもしれない

しかしその一般の中に自分が紛れ込んでしまう事で、関係ない人たちを巻き込む恐れがあるからナギは自家用という手段を取ったのだ
(確かに旅行とはいえ浮かれていてはダメだ。場所は外国、どんな危険が待っているかわからない…)

ハヤテは誰に悟られる事なく密かに決心する

(三千院家執事として、僕がお嬢さまをお守りしなければ…！)

とハヤテが一人決心してる最中、ナギがハヤテに声をかける

「そうだハヤテ。お前は旅行の間は執事服着なくていいからな。バカンス中は好きにしていぞ」

そんな言葉に驚かされたハヤテは普通に疑問を投げかける

「え？ な、何故ですか？」

「行くとわかるけど、ミコノスはものすごく安全な島だからさ」

「もう何年も大きな事件が起こっていない平和な島ですよ」

ナギとマリアの二人が言うとなんだか説得力がある

「きっとマフィアもとつくに廃業してるだろうから、守ってもら
う必要はない。それに何より…」

ナギは一拍間をあけて次の言葉は紡いだ

「これはバカンスなんだから」

また所変わって

今度は白皇学院内の深い森の中

そこは海音と千桜が出会った場所だ

「ここって…」

「はい。僕と千桜さんが出会った場所です。ここに、デンライナー
が…」と

海音がケータロスを弄る

するとさっきまで何もなかった空間に電車が現れた

それが海音の移動手段

デンライナー・ゴウカだ

「…え？　もしかして海音くん、これで行くの？」

「はい。流石に時を飛んで移動は出来ませんし、移動速度は平均の飛行機並みですけど…。高度を高めれば問題ないと思います」

海音と二人で旅行に行くのは嬉しくないと言ったら嘘になる

無論嬉しいに決まってる

ただ…

> 流石に、ゴウカで移動するのはちょっと…無理があるんじゃないかねえか？<

呟いたのは海音の首にかけてある四色の宝石の赤、「モモタロス」だ

「大丈夫。こういうのって、堂々としていれば受け入れてもらえるよ」

そのポジティブを見習いたいよ

千桜は心の中でそう心情を吐露した

とりあえず千桜は色々振り切ってデンライナーに乗り込んだ

これから始まる海音との旅に想いを馳せて

「あ、そうだ千桜さん」

「ん？」

デンライナーの中でラノベを読んでいた千桜は海音に呼ばれて顔を上げた

「旅行先に着いたら、僕の傍をあまり離れないでください」

「え？ そりゃ、離れる気は、ないけど…」

言った数秒後のその一言が物凄く恥ずかしい言葉だと気づき顔を真っ赤にする

「正直にぶっちゃけると、マフィアとかがないとも限らないんです」

「む、むう」

至極当然な問題だ

「千桜さんにもしもの事があつたら千桜さんのご両親に顔向けできない。…だから貴女は僕が守りますから」

「…め、面と向かって言われると、照れるな…」

頬を赤らめながら千桜は返す

「ちーちゃん顔が赤ーい」

デフォルメリュウタロスがそんな千桜を冷やかした

「ば！ ななな何言ってるんだリュウタ！」

「だってホントなんだもーん」

とてとてという擬音が漫画なら書かれてそうな速度で海音のペンダントの中に戻っていった

「…まったく、リュウタったら…。…ごめんね、千桜さん」

「気にしないで、もう慣れてきたから」

そう考える自分も、なんだかいけない気がする

そんな思考を千桜は心のゴミ箱に投げつけた

「とにかく、私をエスコートしてくれるんだろう？」

そう千桜が言うと海音は数拍黙った後千桜の前に歩いていき、膝を着いて

「はい、お任せあれお嬢様」

最近読んだ黒い執事っぽく海音は手を差し出した

「…、こほんっ。…任せるぞ、海音」

ノリに合わせて千桜も返し、その掌に自分の掌に乗せる

そしてお互いの顔を見て、どちらともなく微笑んだ――

チャプター2（前書き）

空港到着、そして出会う二組の物語

チャプター2

「お、見えてきたぞ」

俺がそれを言うと皆一斉に窓を見始めた

「うわぁ…！」

隣の美琴が感嘆の声をあげながら、視線を一点に集中させる

その後その一点の周囲に目を配らせる

「あれがエーゲ海か…、人生生きてる内に、こんな絶景が見れるなんて…！」

「な、なんだかとうまが悟りをひらいた修行僧みたいなんだよ」

きつとそれはいつもの発作だ

俺は内心そんな事を呟きつつも、高揚する気分を隠せない

「けど確かになかなか見れないよな、こんな光景」

「俺も色々海外生活してたけど、初めて見たぜ…」

ふと気になる単語を聞いた

「伊達さん、海外言った事あるんですか？」

そんな疑問を先に感じた紅司くんが俺より早くその事を聞いたです

「昔医者やっててね、紛争地域の近くに陣取って、怪我人を治療してたのよ」

そう言っただけか遠い目をする伊達さん

その目に何かを感じ取った紅司くんはそれ以上追求をしなかった

「そろそろ空港に付くから、席に座ってベルトを締めてくださいーい」

神裂の一言でガタガタと音を立たせながらそれぞれ席に座りベルトを装着

着陸姿勢を取った

「…初めての海外旅行…、楽しみだな」

隣の美琴がそう呟いたのを俺は逃がさなかった

…俺なりに、思い出を作ってあげたいと、心から感じた瞬間だった

そんなこんなで飛行機から荷を持って降りる

空港内では怪しい物等を隠し持っているかをチェックするゲートがある

わかりやすく言うとボディチェックだ

天草式の二人は常に武器を隠し持つことを常としている為か、見事そのボディチェックをかいくぐる

神裂も荷物と一緒に七天七刀を送ってるらしく、ボディチェックを受けた後に受付で大荷物と一緒に布でくるんだ七天七刀を受け取っている

ステイルは身に付けている貴金属がセンサーに引っかかり、鬱陶しそくに係員の指示に従っている

伊達さんや、神那賀、俺と美琴はセンサーに引っかかることなく通過する

次は上条当麻とインデックスの二人

当麻は難なく通り過ぎるが

>ビー！<

インデックスが引っかかりました

「にゃ！ と、通してほしいんだよ！」

インデックスが着ている修道服は大きめの安全ピンで繋ぎ合わせている

その安全ピンが金属製な上、使い方次第では凶器になると判断されたのだ

数人のSPみたいな黒服を着た係員がやってきてインデックスの周

困をかこむ

「ちょ…通してよ！　ねえってば！」

このままではジリ貧だ

そう感じた当麻とアラタは頷き合う

まず当麻がインデックス近辺にいる係員を説得し時間を稼ぐ

その隙に空港内のお土産ショップ等を漁り金属製安全ピンの代わりになるものを物色する

…お、このプラスチック製の安全ピンなんかいかがだろうか

レジに赴いてそのプラスチックピンを清算し、急いでインデックスたちの所に戻る

「美琴、インデックスの安全ピンのところをこのプラスチックピンに付け替えてきてくれないか？」

「おっけー。インデックス、ちょっと来なさい」

「うん、わかった」

美琴につられてインデックスはトイレに入っていく

「到着早々災難だねえ、上条ちゃん」

若干疲れた顔をしている上条当麻に伊達さんが言葉をかける

「全くです…」

「本当にな。上条当麻、貴様貴金属類が引つかかる可能性がある事くらいはわからなかったのか？ あの子に無駄な事をやらすな」

眉間にシワを寄せてステイルが当麻の胸ぐらをつかむ

「気が付かなかったんだって！ ホントだよ！」

このステイル、実は過去にインデックスの隣にいた人物なのだ

しかしインデックスは最大主教により植え付けられた魔術により、一年ごとに記憶を消さなければならぬ状態にあった

ステイルは記憶が無くならない方法を探し奔走するが、結局何も出来ずに、涙を流しながら断腸の想いで彼女の記憶を消去した

そしてステイルは誓った

「君が全て忘れても、僕は何一つ忘れず君の為に生きて死ぬ」、と

「ステイル…、彼もそう言ってるようですし…」

今ステイルを宥めている神裂火織もその一人

ステイルと共に奔走したインデックスの親友

どんなに思い出を作っても、どんなに楽しく過ごしても

一年の度にリセットされる

そんな拷問みたいな事を二人はずっと実行し続けてきた

ならその悲しみを少しでも軽減させようと二人自らが「敵」となる事で、悲しみを和らげてきた

しかしその呪縛を解き放った一人の少年がいた

その少年が今ステイルに胸ぐらを掴まれている上条当麻だ

異能ならば全てを打ち消すその右手「幻想殺し」でインデックスに植え付けられた魔術を打ち消した

少年のおかげで今のインデックスがいる

ステイルは既に自覚している

かつて自分がいた場所には上条当麻がいて

もうその場所には戻れない事も

だがステイルは自らに立てた誓いを最優先とし、今後もそれを変える事はない

それほどの決意を、彼はしたのだ

「今後はしっかりと確かめるんだな、上条当麻」
パツと胸ぐらを離れたステイルはタバコを取り出して吸い始めた

「はあ…、やっと解放されたぜ…」

げっそりしている当麻に俺は声をかける

「災難だったな、当麻」

それに対し苦笑いをして返す当麻

「お待たせー、ちょっと手間取ったー」

安全ピンを付け替えたインデックスと美琴が駆け足で戻ってくる

「気にすんな、そんなに待ってないから」

「とうまとうま、あれ食べたい！」

「早速かよ！ 機内食あれだけ食べてまだ足りないか！！」

機内食を数十人分たいらげた時は流石に驚いた

そんなインデックスを優しげな瞳で見守るステイルの表情がどこか寂しげだったがすぐに笑みを浮かべた

と、そんな時

「運命をバカにするなー！！」

そんな大声が俺を含むそれぞれの人物に聞こえてきた

「運命をバカにするなー!!」

そう言ってお嬢さまは僕の顔面に自分が持っていたカバンを直撃させた

結構痛い

「だ、大丈夫？」

近くに居合わせた泉さんが駆け寄って声をかけてくれる

「え、ええ……」

なんだか体が痙攣する

だけどこんな難所何度もうぐり抜けてきたから、なんとか耐えられます…そう、気合で

「ハヤテくん、本当に大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですマリアさん。…だけど、どうしてお嬢さまはそんなに怒ってらっしゃったのでしょうか…」

空港で偶然泉さんや朝風さん、花菱さんと出会って、今晚はヒナギクさんと西沢さんがやってくる

そう偶然が重なるとちよつとした運命を感じ率直な感想をお嬢さまに告げただけなのに…

ちなみにマリアさんが苦笑いしながら僕を見ていた事に僕は気付きませんでした

「こらー！ スフィンクスー！」

いきなり幼い女の子の声が聞こえた

「インデックスー！　なんで連れてきてんだよー！」

「だってだって、スフィンクスだけお留守番なんて可哀想なんだもん！　…あ、待ってよスフィンクスー！」

向こうの方から小さい三毛猫が走ってくる

僕は目の前を駆け抜ける三毛猫をタイミング良く捕まえた

「おっと…、捕まえましたよ」

手の中ではたばたと手足を動かす三毛猫は可愛い

「わー♪　可愛いー！」

泉さんがお腹の辺りをさわわしている

「ホント…。雑種…。ですかねー」

マリアさんも興味深そうにその三毛猫を見る

「シラヌイに似た可愛さがあるな」

何時の間にか戻ってきたお嬢さまもその三毛猫を見ていた

「はあ…。はあ…。ありがとう、スフィンクスを捕まえてくれて…」

息を切らした修道服の…

「…シスター？」

頭に被ってるフードからはみ出ている銀髪に瞳は碧眼

どう見ても外国のお方だ

「はあ…。はあ…。すいません、ご迷惑かけて！」

シスターの後ろを追ってきたツンツン頭の人が頭を下げる

「迷惑だなんてそんな…」

言葉を返しながらシスターに三毛猫を返す

「全く。勝手に行っちゃダメだよスフィンクス」

スフィンクス
頬摺りしながら三毛猫を撫でる

「当麻ー」

ツンツン頭の人の更に後ろの方から歩いてくる二人連れ

一人は白い帽子に白スーツを着込んだ一見紳士みたいに見える男性、その隣には薄茶色の髪に肩辺りまで切り揃えられた髪に制服のブレザーを着てスカートを履いていた女性の姿があった

「スフィンクスは？」

「この人が捕まえてくれたんだよ」

そう言ってシスターさんが僕に顔を向けた

「他の皆は？」

「先に宿泊先に行ってもらった。おつきい荷物も建宮さんと伊達さんに持ってもらったよ」

ツンツン頭の人はそれを聞くと安堵の息を洩らした

「あ…、なんか色々世話になって悪かったな。…俺は上条当麻、んでこいつはインデックス」

上条さんは紹介しながらシスターさんの頭をポンと叩く

「よろしくね、ネコのお兄さん」

「ど、どついつ覚えられ方ですか…」

それにインデックスって…

ものすごく気になったけど追求は止めておいた

第六感がそう言っている

「ふふふ。…自己紹介するならば、我々もしなくてはなるまい！」

朝風さんがそう言つと

「ニコニコ笑顔の、いいんちよさんレッド、瀬川泉！」

「クラスの叡智！ 副委員長ブルー、花菱美希！」

「そして敵か味方か！？ 風紀委員ブラック、朝風理沙！」

『三人揃って！！ ザ・生徒会役員！！』

ドオオン！ と背後で爆発音がした（気がした）

「個性的な面子だな」

苦笑いしながら白い紳士さんが呟いた

「御坂美琴、よろしく」

「三千院ナギだ」

ああ！ お嬢さまが交友を深めてらっしゃる…！ これはおめでたい事だ

「鏡祢アラタ。好きなよう呼んでくれ」

「綾崎ハヤテです。よろしく願いしますね、鏡祢さん」

言って僕らは握手を交わす

「ここで会ったのも何かの縁ですし、良かつたら途中まで一緒にどうです？」

「良いんですか？ どうする？ 当麻」

「せっかくの好意だし…、受け取ろうぜ」

「おっけー。…じゃあよろしく願いします」

鏡祢さんが頭を下げた

「いえいえ…、ナギの友達を増やすいい機会ですわ」

そついう事ですか！ さ、流石マリアさん…

比較的友好的な鏡祢さんたちと行けば、お嬢さまの友人も増えるかもしれない

「では、我々は先に行くぞ。さらばだ、ハヤ太くんたちっ」

泉さんたちがとて、と空港から走っていった

「…ではハヤテ、私たちも行くぞ」

「はい、お嬢さま」

道中

先ほど綾崎ハヤテと名乗った人物の口から意外な単語を聞いた
それとなく落ち着いた物腰の女性に近づいて聞こうとした

「あ、そういえば名乗っていませんでしたね。私はマリア、三千院
ナギお嬢さまの世話係をしています」

「世話係？ それって、メイドって事？」

「そう受け取ってもらって構わないですわ」

「え、となるとお嬢さまは…」

美琴と割と楽しく会話してる金髪ツインテールを見る

「…これは凄い方と出会ってしまいましたねー…」

俺は苦笑いする

「毎日が苦労の連続ですけど、それでも楽しいんですよ、ナギお嬢
さまといると」

言いながらマリアさんは純粹な笑みを浮かべた

「…となると、彼も？」

「ええ、ハヤテくんは執事です。…最初はガン。ムみたいな印象が強かったですね…」

どんな印象だろう

ものすごく気になったが、聞くと長くなりそうなので止めておいた

「上条さん」

前方から人影が見えた

ふわふわした羊みみたいなトレーナーの上からピンクのタンクトップを着込み、濃い色のズボンを履いた女性、五和だ

「やっと見つけましたよ…」

近くまで走ってくると疲れたのか肩で息をする

「五和が近くにいてるって事は、宿泊先は近くにあるのか？」

当麻が聞くと五和は頷いて

「はい、この道を真っ直ぐに数キロ行くと旅館みたいな建物があります。そこが宿泊先です」

「わかった。…綾崎、俺たち一旦ホテル…かどうかわかんないけど、

一度宿泊先に行くぜ」

「わかりました。お互いに楽しい旅行を過ごしましょう」

当麻と綾崎が軽く握手すると

「じゃあアラタ、行こうぜ。ほらインデックスも」

「うん。またね、なぎ、ネコのお兄さん」

先に当麻とインデックスが五和の後を走っていく

「じゃ俺たちも。行くよ美琴」

「うん。それじゃあね、三千院さん」

「うむ。またな」

軽く別れを告げて俺たちは宿泊先へと急ぐ

…だが、後ろで手を振っている綾崎たちとはまた会う気がしてならなかった

なんだろう

予感なのだろうか

——これが、長い旅行の始まりだった

アラタたちとハヤテたちから遅れる事数十分

千桜と海音が到着した

「…これが、海外」

空港のガラスに手をつけてその景色に見とれる千桜

「千桜さん、まず宿泊先を確保しますから、一旦移動しましょう」

「あ、うん。わかった」

千桜がたたたと荷物を持って走ってくる

「海音くん」

「ん？ なに？ 千桜さん」

「楽しい旅になるといいなっ」

純粹な笑顔に一瞬ドキッとする

「そ、そうですね…」

赤い頬を隠すため俯きながら海音は歩く

他とは違い彼らは二人きりでの旅行だ

これからの旅に、二人は想いを馳せる

三組がどう交わり、物語を紡ぐのか

絆の石を中心にゆっくりと、しかし確実に回り始める――

チャプター3（前書き）

リアルサイド　＼鷺ノ宮のお嬢さま＼

チャプター3

三千院家の別荘

綾崎ハヤテはベランダに降り景色を眺めていた

「これがエーゲ海ですかー!!」

十七歳で凄まじい体験をしてきた彼にとって、このエーゲ海というものは一生に一度見れるか見れないか、いや下手すりゃ絶対見れない絶景だったろう

「ほらお嬢さまも早く早く!! 海がすごく綺麗ですよ——」

そのお嬢さまは現在パソコンに夢中だ

「私のノートパソコンのクリアブラック液晶も綺麗だからいい」

その引きこもりを体現するような発言にハヤテは苦笑いを浮かべるばかり

「せ、せっかくの旅行なのにテンション低いですねー…」

「高くなる理由がないからな」

「先ほど上条さんや鏡祢さんたちと一緒にいた時は楽しそうでしたのに…」

「それはそれ、これはこれだ」

しかし三千院ナギお嬢さまのテンションが上がらないのには明確な理由があるのだ

（狭いミコノスの中学校の連中がいて、夜にはハムスターやヒナギクが来るというのに、一体何が嬉しいのだ…）

三千院ナギは綾崎ハヤテに好意を抱いている

いや、本人は恋人同士と「思い込んで」いる

なぜナギはハヤテと恋人同士だと信じて疑わないのか

それはハヤテがナギを誘拐しようとした所まで遡る

その時ナギに対して『僕は君が欲しいんだ（人質として）』なんて事をナギに向かって言い放ったのだ

それを「愛の告白」と見事勘違いした三千院ナギは、自分とハヤテは相思相愛と信じている

一方ハヤテは子供には全くもって興味ないため、綺麗にすれ違っているのだ

ちなみにこの誤解、現在進行中

まだ解けてはいない

この真実を知るのはメイドであるマリアだけ

「じゃあ外に行きましょう外！！ 青空の下ならテンションも上がりますって！！」

確かにこの青天の下なら子供ならテンションがあがるかもしれない

しかし

「暑いじゃん」

一蹴されました

「せ、瀬川さんたちや鏡祢さんもいるんですから、一緒に遊ぶと楽しいと思いますよ」

「だったらハヤテ一人で行ってくればいいじゃないか」

ナギはカタカタとノートパソコンのキーを叩きながら

「私はこう見えてもプロ、プロの引きこもり。リゾートに来たからといって引きこもりを怠る訳にはいかないのだ」

それはどんなプロなんだろうと考えずにはられない

てゆうかなんだよプロの引きこもりって

「じゃあ外に行かず、ずっと引きこもってるんですか？」

「ああ」

ナギが素っ気なく答えると

「…そうですか」

明らかにテンションがガタ落ちしたハヤテの声色

「…お嬢さまと一緒に、楽しくリゾートを満喫したかったなあ…」
そんなテンションにちよつと罪悪感を感じるナギ

終いにハヤテは部屋の隅で体育座りをしてしまった

「ずーん」という表現がピッタリな状態だ

「ああ…、ハヤテくんとってもかわいそう…」

マリアにまで言われる始末

流石にナギも折れた

「ああもうわかったよ！！　ちよつとただだぞー！！」

まったくといった感じでナギはノートパソコンをシャットダウンし
帽子を取る

（…まあいい、バカンスになんか頼らずとも、ハヤテはいつも私と
一緒なのだ）

唐突にナギは思い出す

遠い昔、マフィアから命がけで守ってくれた男の言葉を

『過去でも未来でも、僕が君を守るから…』

その男は自分を守った後煙みたいになくなってしまった

(そうさ。ハヤテはあんなウソツキとは違うのだ)

「言ったそばからどこ行つたのだハヤテは!!」

「ヘンですねー、さっきまで一緒にいたのに…」

「一体どこまで飛ばされた帽子を拾いに行つたのだ!」

風に流された帽子を取ろうと跳躍したら忽然と姿を消してしまった
綾崎ハヤテ

ちなみにハヤテはこのとき摩訶不思議パワーでタイムスリップし、
過去のナギの所にいるのだが

「まあバカンスだから好きにしていいいとも言いましたし、ハヤテく
んのことだから心配ないと思いますが…」

「それでも急にいなくなるなんて…」

「私たちと一緒にいるのがよっぽどイヤだったんですかね」

「へ?」

マリアの口からそんな言葉が放たれた

「それとも他に一緒にいたい誰かが…」

「な！ 何を言ってるのだ！！ ハヤテは私の事が大好きなのだ！
！ そんな大好きな私と一緒にいたくないなどと…」

嫌われてたりして

「！！」

そう意識してしまうとどうもその不安は拭えない

（いやいや、何を言ってる。そんな、嫌われるだなんてそんな原因
…）

みりんと間違えて洗剤を鍋にぶっこんでしまったり

割と痛いツツコミをハヤテに放ってしまったたり

思い出せばありすぎて困る

「まあ、私たちと遊ぶより瀬川さんたちや同年代の上条さんや鏡祢
さんたちと一緒にの方が楽しいかもしれませんけど…」

「！？」

その言葉にナギはハツとする

（…確かに、私のようなわがままな女と一緒にいるより、他の女や
同年代と一緒にの方が楽しいのかも…）

そう考えてしまうと目尻に何か熱いものがジワリとくる

「もしかしたら、瀬川さんたちとビーチに行ったのかもしれない
ね」

「ビーチ？」

「ほら、ミコノスにはあるじゃないですか。パラダイスビーチって
いう、ヌーデイストビーチが」

ピキ！！ と何かがナギの背筋を走った

「それはいかん！！ いかんぞハヤテえー！！」

「ちょ、ナギ！！ あなたまでどこへ！？」

「ちょっとハヤテを捜してくるのだー！！」

「いやー、到着早々仲良くなったなー」

宿泊先の各部屋にて

「全くだなー。…本当にこれは普通な旅行になりそうだよ」

軽い荷物を部屋の隅にまとめて、当麻と頷き合う

部屋には現在友人の当麻のみ

部屋割りでこうなった

美琴とインデックス、五和と神裂、ステイルと齊堵、伊達と建宮、神那賀と紅司、咲良といった部屋当てがなされた

「さて…、当麻。俺は少し散歩に行つて来るな」

「ん？　おー、俺はちよつとこら辺り写メつとくな」
いかにも普通な行動を取る当麻を尻目に、アラタは部屋を後にした

「…王玉かー」

何となく呟いてみる

橙子から言われて来たのだがよく考えれば実物を見た事がなかった
見た事もないものをどう見つけよう

「無理だな、うん」

諦めが早かった

アラタは白い帽子を軽く握り頭から取る

そして満天に広がる青空を見上げてみた

「…青いなー」

白い雲がまばらに散らばりまっさらな空を彩る

学園都市、つまり日本でもなかなかこんな空は見ないだろう

そんなどうでもいい事を考えていると背中に軽い衝撃があった

「ん…？」

後ろを向くと和服を来た黒髪の女の子（バニー耳付き）がなんだかおろおろしてたのだ

「ご、ごめんなさい…、ちょっと、前を見てなくて…」

「あ、いやいいんだ別に。怪我とかないか、嬢ちゃん」

「は、はい…。五体満足です」

「そ、そりゃ良かった」

五体満足じゃなかったら俺は一体どうすればいいんだ

とりあえず橙子に義手義足を頼もう

アラタはそう考えてると

「あの…、もしかして私がぶつかった場所が腫れ上がったとか…」

よよよ、と言った感じで（それと一緒にバニー耳もしおれてる）し
おしおとなっていた

「いやいや、そんな柔じゃないし、大丈夫だよ。めっちゃ元気だよ」

それを聞くと女の子は笑顔を浮かべ

「良かった…」

ホッと一息ついた

因みにアラタは内心ハア、っしていたのは内緒である

女の子は鷺ノ宮伊澄と名乗った

「となると、三千院さんのお友達？」

「はい。…あれ？ ナギをご存知なんですか？」

「ああ。空港で会って、ちょっとしたキツカケで仲良くなったんだ」

「まあ…。これからもナギの友達でいてくださいね」

「もちろん」

とそんな他愛ない会話を伊澄と交わしていると

「あら…？」

伊澄が誰かを発見した

「ナギ…？」

「え？」

アラタも伊澄と同じ場所に視線を向ける

そこには塀に座り込んだ三千院ナギがいた

「…そういえば、ここで命を狙われたとき助けてくれたアイツも、突然いなくなっただな…」

ふと公衆電話を見る

それは以前アイツが私に警察に電話をかけさせようとした電話

そして近くには海があった

自分を助けてくれたアイツと一緒に眺めた場所

『一緒に星を見に行きましょう』

自分を助けた男はそう言った

「たしかここだったな。…アイツがいなくなったの…」

一緒にここで海を見て、唐突にいなくなった

「…あんな事言っておきながらあいつも…、本当は私と一緒になんかいたくなかったのかもしれない…」

その辺に落ちていた木の枝を拾い上げ、砂浜に「ウソツキ」と書いてみた

波にとらわれいずれ消えるが特に意味はない

書きたくなったのだ

（きっとハヤテも…私みたいなヤツと一緒になんか…）

「ハヤテ…」

空が紅に染まっていく

「ハヤテ…」

静かな波の音が聞こえる

うつすら涙が零れてくる

「ハヤテえ——！！！」

その叫びも波の音にかき消されていく

「…、」

虚しくなったのかなぎは塀に座りポツリと呟く

「ふんだ。ハヤテのバーカ…」

そう呟くとまた無性に苛立ったナギはまた叫んだ

「バカバカバー…」

すると突然自分の隣に気配があった

叫ぶのを止め隣を見るといなくなった綾崎ハヤテが呆然と帽子を持つて立っていたのだ

「は、ハヤテ！」

「！ お嬢さま…？」

「どこ行ってたのだ、マリアも私もずっと心配したのだぞ」

「お嬢さまこそ、こんなところで何を？」

「へ！？　や！　な、なんでもいいではないか！！」

先ほどまでちよつと涙目だったので慌てて空元気しごまかす

「ところでお嬢さま。僕さっき不思議な体験をしたんですよ」

「不思議な体験？」

「ええ、白昼夢かもしれませんけど」

ハヤテは遠い海を見ながら

「けど、なんでそんな体験したかはよくわかりません…」

「それはきつと、誰かが星の力を使ったのかもしれませんが」

二人の背後からまた別の声が聞こえた

「伊澄さん」

伊澄の後ろにはアラタも立っている

「何です？　星の力って」

伊澄はゆっくりとした足取りでハヤテとナギの付近に立ち

「流れ星に三度願えば願いが叶う。…そんな魔法を、どこかの誰かが使ったんですね」

ハヤテは思い出す

かつて下田に旅行に行った時

夢の中に出て来て

『呼べばどんなところにも来てくれるのね』と言ってきた一人の女性

「そっか、じゃあいつも星空を眺めていた人が、祈るように願ったんだな」

ナギが言う

そんな事を行う人物を知っているように

「時間を飛び越えてでも守ってやれってですか？」

「へ？ 何のことだそれは」

ハヤテは笑顔で首を振り

「いえ、ただの独り言です。けど…」

ハヤテはその笑みをナギに向けて

「何も言わなくても、お嬢さまには全部伝わっている気がします」

真っ直ぐに言われ、そして先ほど思った事をナギは反省し

「そっだな」

赤い頬を隠しながらナギは言う

「これからの未来もよろしくな！」

「はい、よろしく願いしますね、お嬢さま」

そんな二人をアラタと伊澄は後ろの方で見守っていた

「やっぱりあの二人はお似合いだと思いませんか？ 鏡祢さん」

「そうだね、パツと見、兄と妹みたいな感じだけど」

そうですね、と伊澄は苦笑を浮かべながら再びナギらに視線を戻す

「私は昔、彼女を傷つけてしまったことがあるんです」

唐突に彼女は語り出す

「彼女のお母さんが亡くなって、悲しむナギは見たくなかった。…
声くらいは聞かせてあげられる事は出来るかと思っただけですが、
ただ彼女の心を傷つけただけ…」

「…なるほど。まだ十三歳くらいなのに、強いんだな、君は」

「いえ…。まだまだです。私は未だ未熟、もっと精進しないといけません」

「なれるさ。君なら」

アラタは伊澄の力を見ていない

だが彼女の漂うオーラを感じ取ったのだろう

「おーい、そろそろ戻るぞー」

気付くとナギとハヤテは移動していた

「…じゃあこつちも戻るかな、当麻や美琴が心配だ」

「途中までは一緒ですから、良かったら動向しましょうか？」

「お、じゃあ動向されましょう」

前を歩くハヤテとナギを追って、伊澄とアラタも歩いていった

チャプター4（前書き）

集まる人たち　　ゝ類は友を呼ぶ？ゝ

チャプター4

「なに考えてたの？ ヒナさん」

「ここは海上に行く船の上」

その船に乗っているのは白皇学院現生徒会長「桂ヒナギク」と潮見高校に通う何かと「フツ」な女子高生「西沢歩」だ

どれくらいフツーかと言うと「豆腐にはしょうゆ」みたいにフツーなのだ

「わかりにくいと思うけどな…」

「歩？」

どこか遠い目をして何かを呟く西沢にヒナギクは問いかける

「なんでもないです。…改めて、なに考えてたの？ ヒナさん」

「んー？ ナギたちも、この星空を眺めているのになって」

「あたしも」

言って二人はクスリと笑い合う

「ハヤテくんにも、早く会いたいね」

「へ！？」

そんな不意打ちをくらってヒナギクは赤面する

「え、あ、うん…」

すっかりゆでだこみたいに真っ赤になったヒナギク

「そ、そうね…」

そんなヒナギクに向かって西沢は笑顔を浮かべる

「けどこの旅行にきて初めてじゃないかな、こうして二人きりでゆつくり話すの」

「ああ…、そういえばそうね。…ごめんね、せっかくの旅行なのにいろいろ騒がしくして…」

ヒナギクが謝っているのは彼女の同級生である「生徒会三人娘」の事だ

泉、理沙、美希はたいへんイタズラ好きで、いつもヒナギクは迷惑されている

三人がイタズラし、ヒナギクが怒鳴るといっなのはもう日常風景といっても過言ではない

「いやー、仲良くなれてとっても楽しいよー。昨日の夜なんか衝撃の事実を知ってもードッキドキだったし…」

「衝撃の事実？」

何だろうそれは

「あ、そっかヒナさんその時もう寝てたから知らないのかー、理沙さんのこと」

「理沙がどうかしたの？」

「んとねー…」

話は昨日にさかのぼる

昨日の夜、ヒナギクは疲れから少し早めに寝てしまったのだ
その数分後

「ま、キスくらい私もしたことあるんだけどな」

突如理沙の口から語られた衝撃の事実

『…』

黙る三人

ちなみにその三人は泉と美希、歩だ

「なにiiiiiiii!?! ちょ! 理沙お前!?!」

「えー!? ホントなの理沙ちゃん!?!」

その大声でちよっぴり目が覚めたヒナギクは夕食かなにかだと勘違いした

「あ、ハンバーグなら私もたべる…!」

「ヒナさんは黙ってて!?!」

「ハンバーグはあとにしなさい!?!」

そう一喝されたヒナギク（寝ばけまなこ）は「なによもー」と言いながらまた深い眠りについてしまったのだが

「け、けど!! それって要するにあれだな!?!」

「わっ! 私みたいに小さい頃の話っていつか…!?!」

「いや? ここ二ヶ月くらいの出来事だけど」

言って悠然とズズーと紅茶をすす

『…』

三人は再度黙った

否、黙るしかなかった

「ほ、ホントなのそれ？」

ボー、と汽笛みたいな音を出す船の上でヒナギクは聞く

「みたいよ」

「そっか…、身近にいても意外と知らないことってあるのね…」

「ですねー…」

意外はおろかまるつきり予想の斜め上をブツ飛んだ真実を知ったヒナギクはまた遠い夜空をなんとなく眺めてみる

「けどヒナさんはハヤテちゃんとキスしたいのかな？」

「……！！……？」

またブツ飛んだ質問をされた

いや、そもそもどうしてこう恥ずかしい質問をサラッとと言えるのかこの娘は！！

「な、何をいきなり……！！」

「いやー、ていうか前から聞きたかったんだけど。ヒナさんって、なんでハヤテくんの事が好きなのかな？」

「はぁ！？」

更にまたブツ飛んだ質問

「な、なんでって…！？」

顔を真っ赤にしてあたふたするヒナギクを見ながら流石に先の質問は少々恥ずかしかったのか軽く頬を赤くさせて西沢は続ける

「まあ二人つきりじゃないと聞けないし、あと正直その、私が言うのもなんだけど…」

いったん言葉を区切って西沢は言う

「あの白皇生徒会長とハヤテくんでは、その…、バランス悪いって
いうか…」

「貴女がそう言うとはントハヤテくん立つ瀬ないわよ…」

今もありありと笑いながら『借金はあるけど、僕は元気です』と言
ってるハヤテの姿が想像できてしまった

ヒナギクは赤い顔のまま「…むう」と考える仕草をしてやがて

「絶対言わない？」

決心した

「言いませんよ、誰にも」

「私も、その…考えた事があつて。後から思い直してみると…その、一つしか思い当たるフシがないっていうか…」

「はあ…」

「だからね…その」

ヒナギクはそこで一度言葉を区切りたつぷり数秒、間をあけてやがて言った

「…一目惚れよ」

「…、はー…」

意外にも可愛らしい答えだったから西沢はそんな声を吐き出す

「いい！？ ぜぜ絶対誰にも言っちゃダメよ！！ 特にハヤテくんには絶対ぜえつたい知られたくないんだから！！」

「あはは。わかってるって…」

ものすごく真つ赤な顔でまくし立てるヒナギクを笑ってなだめる

やがて西沢は星空を見て手すりに身を預けて

「けどそつか。一目惚れかー…」

呟いて軽くハア、と溜め息を吐く

「そりゃまあ、不幸にもなるわなあ、ハヤテくん」

「？」

突如として意味深な言葉を呟いた西沢にヒナギクは怪訝な顔をする

「けどそれなのに告白しないなんて。ヒナさんはホント負けず嫌いなんだね」

「そー！ そんなことないわよー！」

やがて船も港に付き到着

船から地上に降りる階段を歩きながら会話を続ける

「ただちよつと…。くやしいうていうか…」

「…、」

西沢はそれを聞きながら本人には聞こえないように心の中で思う

（それを負けず嫌いつていうんじゃないかな？）

言つとまた怒りそうなので深い心の中に入れしつかりと鍵を閉める

「見てなさい！ 絶対にハヤテくんにスキだつて言わせてみせるんだから！！」

「その前に私が、口説き落としちゃうもんね」

お互いに言つて軽く見合う

そこにはライバルだからこそ伝わる「何か」があった

「あれ、西沢さんじゃないですか」

心臓が飛び出るかと思った

二人が振り向くとそこにはなんとハヤテとその主ナギがいたのだ

ちなみにその後ろにいた伊澄と男性

二人とも白スーツの男性には見覚えがない

しかしそんなことには気が回らないヒナギクと西沢は

「は、ハヤテくん!？」

「なんでここに!？」

なんてアホな質問をしてしまった

「え? なんでって…、旅行で、ですけど」

「あ、や…。そうだったね…。ところでハヤテくん、今の話…聞いてた？」

顔を赤くし内心ドキドキしながら先の話が聞かれてないかハヤテに問う

「へ? 今の話って…何か面白い話でもしてたんですか？」

ハヤテが聞いてないとわかった二人はわたわたと手を振り乱し

「してない!!」

「面白い話なんて全然してない!!」

全力否定

（あ、危なかった…）

（危つく自爆しちゃうところだったね〜）

顔を赤くしながらひそひそ話を始める二人を見て疑問符を浮かべるハヤテだったが

「じゃ。まあそういうことで。旅行楽しみよ。行くぞハヤテ。アラタも伊澄の案内頼む」

「俺らはどうしてただだからな…」

「！！」

そんなナギの行動に逐一早く反応したのが西沢だ

「待ちたまえ！！」

がつしとナギの肩を掴む西沢

内心ナギが（きたよ…）と思ったのは内緒だ

「えーと、あー。西沢さんでしたっけ。何か私にご用ですか？」

「急に他人の振りしないでくれるかな？」

面倒な事になると感じたナギが速攻で他人の振りをするが西沢は一蹴する

「せっかくこう、はるか異国の地で再会したんじゃない。だからこう、なんかもっとお祝いの事を…」

「行くぞハヤテ」

ナギ一蹴

「て聞きなさいよ!!」

「なんでお前と異国で会った事を祝わなきゃならんだ!! どちらかといえばその不運を呪うわ!!」

「なんですつてー!!」

そうひと悶着あったが問題なくナギの別荘に到着した

「ふわー、別荘でこれはすごいねー」

西沢とヒナギクも込みで

また付近には伊澄とアラタもその別荘を眺めている

伊澄はあまり表情が変わってないがアラタは口をあんぐりあけてスケールの違いにただびっくりしていた

「だからなんでついてきてるのだ!!」

「いいじゃない!! 同じバイト仲間でしょ!？」

ナギはハヤテと早く二人きりになっていちゃラブな事をしたいわけなのだが

「…まあいい、じゃあお前たちだけだぞ!!」

で中に入ると

「あ、お帰り」

「遅かったな」

生徒会三人娘がくつろいでおられました

ずーん、と両膝について脱力するナギ

いや、三人娘だけならまだしも

「あ、お邪魔してまーす」

「あれ、当麻」

アラタの友人や

「おかえりー」

空港で会ったシスター

「マリアさん、クッキーが焼けましたー」

「こっちもー」

美琴と神那賀もいた

「なんでいるのさ、美琴と神那賀が」

「マリアさんに誘われたのよ。それにほら、料理とかも習いたかつ

たし…」

「マリアさんから学ぶ事ってスッゴいあるんですよー」

「五和もいたのか…」

こうなると軽いパーティーモードだ

しかしナギはそれが気に入らないらしく

「なーんでこんなに人がいっぱいいるのだー!!」

「ははは、テレるなテレるな。我々は同じ動画研究部の仲間じゃないか」

「仲間になった覚えはない!!」

「はっはっは。テレるなテレるな」

「テレてなどいないわ!!」

そんな光景を見てたハヤテをナギは見ながら

（ハヤテだって私と二人きりで…）

しかし予想に反して

「そうですね、せっかく皆さん集まったわけですから、お祝いでもするのがいいかも知れませんか」

「なあ！？」

「おー！ さすがハヤ太くん。わかってるじゃないかー！」

「構いませんよね、マリアさん」

「ええ。しかし、どうしたんですか？ ハヤテくん」

そう聞かれたハヤテは笑みを崩さず理由を述べる

「お嬢さまがすぐ引きこもろうとするのは、友達と遊ぶ楽しさがあまりわかっていないからだと思うんですよ」

彼は一度着替えるべく部屋に戻ろうと背を向けながら続きを語る

「ですからお嬢さまの執事として僕が、このリゾートでみんなと仲良くする事の楽しさを教えてあげないと。…そうじゃないと、あの星空から見ている人がまた心配してしまうから…」

それがハヤテの想い

それがナギと共に彼女の母の墓前で誓ったことだから

「じゃ僕ちよつと執事服に着替えてきますね」

「あ、ハヤテくん」

ハヤテは足早に部屋に戻っていった

「…みんなで仲良く、か…」

マリアは一人想う

(…まあハヤテくんが色々な人と仲良くすると、やっかい事が増える気がするんですよ…)

メイドさんの心配は続く

「ふー…」

ドサツと床に荷物を置き息を吐く

「波乱な旅になりそうねー」

軽く額の汗を拭いながら春風千桜は呟いた

「そうですねえ…」

バサア、とベッドのシーツを整えながら同室にいる海音が返す

ここはミコノスにあるホテル

割と安い場所を探す内に一日が終わってしまったのだ

「しかし海外旅行というのも、案外疲れるのね…」

「そりゃそうですね。お金とかも両替しないといけませんし…」

ぼむ、と枕を置きベッドメイキングを終える

「よし…、千桜さん、終わりましたー。先にシャワー浴びててくださいー」

「うん、じゃあお言葉に甘えるよ」

千桜が着替えを持ってシャワールームに入っていく千桜を見送り海音はひと息をつく

「…喜んでもらえるかな…」

言いようのない不安がこみ上げてくる

海外旅行なんてのは初めてだ

それも女の子と二人きりというシチュエーションなんてのも未開の地だ

首にかけてある四色のペンダントにはイマジンたちがいるのだが人間ではないから除外する

「…頑張らないと…」

人知れず海音は決心する

この旅行の間は千桜を笑顔にさせ続けてみせると

「あがつたよ海音くーん」

「あ、はい」

意外に早かった

今日いろいろと歩き回ったから早めに休みたいのだろうか

「気持ち良かったよー、海音くんも入ってきたら？」

「了解ですー」

千桜さんに促されて海音も着替えを持ちシャワールームに入る

（…そういえば、このシャワールーム千桜さんが使ったんだっけ…。
…は！ 何考えてんだ僕は！）

雑念を振り払い海音は体を洗う事に集中する

洗い終わって服を着てシャワールームから出た海音の目に入ってきたのは

「…すう」

椅子に座ったまんまで寝てしまった千桜の姿だった

「千桜さん…」

起きてください

そう言おうと思ったが気持ち良さそうに寝入るその顔は起こすのを躊躇わさせる

「…、」

海音はベッドの毛布を退けて、千桜を抱っこする

起こさないかな、と心配したが思ったより深く寝入っていたようで起きる気配はなかった

「…よいしょ」

優しくベッドに寝かせて毛布をかける

毛布をかけた時ふと気づいた

千桜の手が自分の服の袖をきゅ、と握っていたことに

「…千桜さん…」

なんだか離れるのが忍びなくなってきた

自分を信じてくれる千桜の温もりを袖に感じながらその場に膝をついてベッドに顔をうずめて、就寝した

チャプター5

「ハヤ太くん。次はシーフードカレーが食べたい」

美希が言った

その数分後

「はい、独自ブレンドのスパイスで魚介類の香りが引き立ちますよ」

テーブルの上にハヤテがシーフードカレーを置く

「ハヤ太くん、ちょっとパスタを作ってくれないか？」

今度は理沙

また数分後

「はい、良いトマトと海老があっただのでアラビアータで仕上げてみました」

またテーブルにパスタを置いた

かなりのスピードだ

「ハヤ太くん、美味しいケーキが食べたいな」

最後は泉

これもやはり数分後

「はい、ポイントは甘さを砂糖ではなく水飴で出しているところですよ」

海外でもその高性能ぶりを発揮する執事ハヤテ

そんなハヤテを見てげんなりするこちらの女性陣

「…格が違いすぎる…」

「レベルが、高い…」

「完敗です…」

上から美琴、神那賀、五和だ

「まあ年齢の近い男にあんだけレベルの違い見せられちゃあね…」

人数分の麦茶をお盆に乗せた上条当麻が呟いた

「手伝いか？」

「ああ。ただ遊ぶのも悪いと思ってさ」

ことり、とテーブルに麦茶を置く

「では次はこのケーキに合うコーヒーを…」

「もー…、あなた方いくらなんでも頼りすぎよ」

一方でまたハヤテに何か注文しようとしていた三人娘を制止する

「いいじゃないか。なー、ハヤ太くん」

「ハヤ太くんの作る料理美味しいよー」

無邪気に答える理沙と泉

「僕は喜んでいただけてありがたいです」

当のハヤテは執事という立場だからか、奉仕という行動を楽しんでいるようだ

「全く…ハヤテくんとすぐ甘やかすんだから…」

流石にハヤテにばかり働かせるのは悪いと感じたヒナギクはハヤテを手伝おうと歩を進める

「コーヒーくらいは私が入れるわ、ハヤテくんは待ってて」

すると先ほどまで黙っていた三人娘が

「おお！ 気がきくなヒナ！！」

「私カフェオレ！ カフェオレがいいぞヒナ！！」

「ああもう！！ わかったわよ！！」

今日も大変な生徒会長だ

注文を終えた理沙がソファに体重を預けてふと呟く

「しかしこうして異国の地で、皆と会って夜を明かすのも楽しいな、ナギちゃん」

言われたナギ本人は

「ああ。ホントスマ。ラは楽しいよ」

まさかの大ヒットパーティーゲームを一人で絶賛プレイ中

テンションだだ下がりだ

「い、いかん！ 古来京都ではぶぶ漬けを出されると帰れという合図だったそうだが…」

と理沙

その言葉の続きを美希が引き継ぐ

「現代では遊びに行った先でそいつが一人でマリカを始めたら帰れという合図…。ナギちゃんのテンションガタ落ちだ！！」

果たしてそんな合図があるのかはなはだ疑問があるが、ナギのテンションが低いのはよくわかる

ついでに美琴ら三人もテンション低い

「…皆と仲良く遊べばお嬢さまの引きこもりがちな性格も治るかと思いましたが…」

「ちょっと逆効果でしたかねー…」

執事とメイドがそんなことを言った

…悪くはないと思うのだけれど

「よし！！ ならばナギちゃんのテンションを上げるために！」

「私たちがとっておきの花火セットを！！」

「持ってきてやろうじゃないか！！」

こんな時にはっちャけるのが三人娘だ

「待っているハヤ太くん！！ 今すぐ取ってきてやるからなー！！」

「あちよつと、皆さん…！！」

「…良い人たちだな」

アラタが言った

「…はい。本当に」

それにハヤテも笑顔で返答する

直後にマリアが

「ですけど取りにいつてこの夜中に戻ってこれるかしら」

不吉な一言

「う……」

流石にハヤテが呻く

夜といっても結構暗い

おまけに割と道は迷いやすいのだ

日光がある昼間などは安全だが、夜間は一気に不安になってくる

それくらい暗いのだ

「……私もちよっと一緒についていきますね」

不安になったマリアが道案内役を買って出た

「いいんですかマリアさん……すみません……」

申し訳なく思ったハヤテが謝罪する

「ふん、何が花火だ。そんなものくらいで私は……」

「あの、ところでナギちゃん」

つつけんどんなナギにおずおずと西沢が聞く

「このお屋敷のお手洗いつてどこかな？　ちょっと広くて迷子になりそうで…」

「あ、それ私も聞こうと思ってたんだー」

西沢に便乗して美琴が立ち上がって駆け寄ってくる

「言っておくが、ここからだ結構距離あるぞ」

「ホントに？」

美琴が聞き返す

「ああ、だったら僕が一緒に行つて、トイレが済むまで待ってあげますよ」

そんなことを言ったハヤテの肩に西沢の手がすごい勢いで「ぐわし！！」と掴んだ

「デリカシー。この言葉の意味がわかるかなハヤテくん」

「…あ、はい。すみません…」

失言と気づいたハヤテが再び謝る

直球でああいった言葉を言う人物は流石にいないだろう、とアラタ

は苦笑いする

ちなみに先の発言を聞いた美琴がアラタを頬を赤くしながら睨んでいたが気にしないことにする

「まあしょうがない。案内してやるからついてこい」

ナギが（珍しく）承諾した

「あ、ありがとー」

「ごめんね、ナギちゃん」

素直に感謝を述べる二人だがハヤテは普段がアレなナギの行動に少々驚いた模様で

「お嬢さま！？　なぜそんなに素直な事を…」

「別にいいだろ！？　詮索するなよ」

若干頬を染めているその表情でなんとなくわかってはいた、しかしハヤテは

「あ、そうか、お嬢さまもずっとトイレに行きたくて…」

無神経発言

「デリカシー。この言葉の意味を体で教えてやろつかハヤテ」

「あ、すみマセン…」

また怒られるハヤテ

「…綾崎って、鈍感なのか…？」

本人には聞こえないようにアラタはそんな事を呟いた

「…ん？」

ふとアラタは壁に掛けてあった一枚の絵に目がいった

「どうした、アラタ」

「いや…、この絵…」

言われた当麻も壁に掛けてある絵を見る

その絵は太陽のようなものを背景に、丘の上に一件のお屋敷が建っている

下方行には大小さまざまな柱があつてどこか神々しい

他にも羅針盤や、アラタにはよくわからない人物の絵画が飾っている

「…お金持ちの絵ってやっぱり神秘的だよなー」

無邪気にそんな感想を漏らす当麻

「…ん？ 当麻、こつちには何か文字が書いてあるぞ」

「あ、ホントだ。…状況が全く読めねえなこの絵。昔の王と平民みたいな関係を表してる絵なのか？」

当麻が言ったように幾人の人たちが何かを引つ張り、王冠を被った人に膝をついて頭を垂れている

「何語だこれ。…英語もわかんねーのに、こんな文字…」

と、当麻と二人唸っていると

「それは…フリギア語です」

伊澄が二人に声をかけた

「フリギア語って…、昔ゴルディオンにあったという古代王国のヤツか」

「アラタわかんのか!？」

「いや、昔聞いたことがあるだけで…。てか鷲ノ宮さん読めるのか？」

聞かれた伊澄はその絵の前に立ち書かれている文字を読み始めた

「…アブラクサスの柱の森、剣を持って、正義をしめせ。さすれば道は、開かれる…」

とても意味ありげな文章だ

だがこの言葉が何を意味するのは全くわからない

「なあ、他には何が書かれてるんだ？」

「…いえ、あとはもうあまり良い事は、書かれてありません…」

険しい表情を作った伊澄が言う

その重苦しい雰囲気にな麻は押し黙って

「そ…、そうか…」

流石に聞く事が気まづくなつた当麻はポカンとする

その後伊澄は落ち着いた動作で窓付近に歩いていき、空を見上げた

「…結局、この絵の事は謎のままか…」

「いいじゃんか。…いろいろと謎の方が、解く楽しみが増える」

言ってアラタは窓付近の伊澄を見る

ときどき見せるオーラは彼女のものか？

そんなどうでもいい事を考えた

ところ変わってここは学園都市

総人口二百三十万人の八割が学生というこの変わった都市で、今奇怪な事件が起きている

それは人が金にされるという事件だ

人が金にされるというなんともオカルトじみた事件なのだが、超能力が日常と化しているこの学園都市でそのような事件があってもおかしくない

その事件を調査している一七七支部に在籍する「風紀委員」の一人、ジャッジメント白井黒子は唸っていた

「…人が金にされるなんて、どこの神話ですよ…」

もう考える気力もなくなっていた

金に変えるなんて能力見た事ないし、「書庫」にアクセスして検索してもヒット数はゼロ

「白井さん、何か掴めましたー？」

部屋の奥からコーヒークップを持った花飾り少女、初春飾利が歩いてきていた

黒子の隣まで歩いてきた初春は黒子の近くにカップを置く

黒子は「ありがとう」と短くお礼を言ってコーヒーに口をつける

「それで、何かわかったんですか？」

「全くこれっぽっちもわからないですよ…」

うだー、とカップを置いて机に体を伸ばして預ける黒子

「だけど聞いたことありませんよね…。人を金にするチカラなんて」

溜め息混じりに同意する初春

「…こんな時、アラタさんがいてくれたらなー…」

また奥からクッキーの小皿を持った少女、佐天涙子がそんな愚痴をこぼした

「泣き言言っても仕方ありませんわ。…また洗いざらい調べてみませんと…」

「そうですね…。根気良く頑張っていきましょう！」

「そうだね。私、何か買ってくるよ！」

と気合を入れた三人の元に来客が訪れる

「おい、いるかい嬢ちゃんたち！」

ばぁん、と勢いよく扉を開け放った一人の青年

「…左さん？」

この学園都市で探偵業をやっている、左翔太郎だ

「何ですか？ そんな勢いよく…」

「巷で噂の「人が金にされる」事件は知ってるよな？」

突如そんなことを聞いてきた

「そりゃあ、知ってますわよ。…まあ全く進展がありませんけど」

現在の状況を軽く説明する黒子

そんな黒子に翔太郎は告げる

「実は、犯人がわかったんだ」

衝撃が走った

「ホントですよ！？ 左さん！」

「ああ。犯人はドーパントだ。まあ、これはなんとなく予想はできただろ？」

「当然ですわ。学園都市であんな能力は確認されてない、となるともう怪人関係しか思い当たりませんもの…」

しかしそこから調査が進まず、困っていたのだ

「俺もその線で調べてて…、さっき相手の居場所を知る事が出来たんだ」

「居場所って、どこです？」

真剣な面持ちで初春が聞く

数秒、間を開けて翔太郎が答えた

「アテネだ」

メモリの名前は「ミダス」

ある神話に登場した触れたものを金に変える力を持った化け物だ

しかしその力は完全ではなく、まだ不完全だ

だから神話を調べ、ミダスに関わりがあるアテネにメモリ所有者が逃亡したと踏んだのだ

「翔太郎、照井から預かった例のモノ、忘れてないよね」

「ああ。ガイアメモリ強化アダプターだろ？ 忘れてないさ」

一緒に行けない照井から「アラタに渡してくれ」と預かったのがガイアメモリ強化アダプターだ

これはその名の通りガイアメモリを強化し、性能を高める力を持っている

「翔太郎さん」

名前を呼ばれる

振り向くと黒子、初春、佐天の三人が旅行カバンを持って歩いてきていた

「お待たせしました」

「いや、そんなに待っていない。目的はメモリ所有者の確保だけど、せつかくの海外だ。楽しんできてくれ」

「はい！ 思いっきり楽しみます！」

「初春…、あまり羽目を外さないでくださいまし」

黒子が釘を刺すがはつきり言って不安だ

初春の後ろでは佐天が苦笑を浮かべている

「さて…、それじゃ行くか」

談笑しているとフライトの時間が近づいていた

翔太郎はフィリップと三人を促すと受付へ歩いていく

この事件を解決するため、そしてちょっぴり楽しみな海外に思いを馳せて

とある飛行機内部

男は座席に座り俯いてジッと動かない

ただ、呟く

「…待っていてください、我が、王よ…」

男は両手で持っているメモリのスイッチを押す

>MIDASU<

それは、波乱を呼ぶ火種――

チャプター6（前書き）

変身　くその名はスカルく

チャプター6

「ふー…今日は一日でいろいろあったなー…」

現在三人娘が持ってきてくれた花火を遊ぶため全員外出している

無論ハヤテもその一人だ

「お嬢さまも御坂さんたちと楽しんでらっしゃるし…。一時はどうなるかと思ったけど…」

ふう、と壁に寄りかかりながらハヤテは呟く

「おーい、ハヤ太くん」

遠くから泉が小走りで駆け寄ってくる

「瀬川さん」

「ハヤ太くん、花火もう少し持ってきてこようと思うんだけど、良かったらついてきてくれるかな？」

「あ、別に構いませんよ」

確かに夜も深まってきていたから、一人で行っては迷ってしまうだろう

ハヤテは快く承諾した

「それにしても皆で花火するのは楽しいですね」

「そうだね、まさにバカンスって感じだね」

夜の街を二人で歩きながらそんな何気ない会話を交える

ハヤテにとってこういった旅行はなにしろ初めての経験だ

「けどこの旅行はホント楽しいよ。皆といっぱいお話できて」

「そうですね」

「瀬川さんは皆さんとどんな話をしたんですか？」

「ふえ？」

不意に話題を投げかけられた

「えー、あゝ…どんな話かって言うと…」

キスである

「えつと…、そのー…」

顔を赤くして頭を掻く泉

何だろう、とハヤテは頭に疑問符を浮かべたとき

「あ、あのさハヤ太くん!!」

「はい？」

「ハヤ太くんは…、キスしたことある？」

「…は？」

またブツ飛んだことを問いかけられた

「ええ！？ そんなの、あ、あるわけないじゃないですか！！」

「あ、そうなんだ？ ハヤ太くんモテそうだからあるのかと思ったよー」

小さい頃には何度かしたことあるのだが…

「私ね、すごくちっちゃい頃に一度だけあるんだー」

そんなハヤテの内心を知ってか知らずか泉は話し続ける

「名前も知らない子なんだけど…、かつこよくて、やさしくて…一生懸命で。きっとその子の事私は応援したかったんだと思うんだ…」

その話を聞いてハヤテは素直にその人物に感心する

「へー、よっぽどかつこよかったんですねーその人」

「んー…顔はなんとなく覚えてるんだけど…」

言ってじーっとハヤテの顔を覗き込んだ

どこことなく、小さい頃キスした少年に似ていたからだ

「いやいや…まさかねえ」

「は？」

「にはははは。なんでもないよ！！早く花火とってこようよハヤ太くん！」

「は、はあ…」

元気な泉を追ってハヤテはその後ろに行く

まだ旅行は、終わらない

所変わって海岸

三人娘が持ってきた花火で遊ぶため皆で外にでていたのだ

「ト。ンザム…ラ。ザー！」

ナギが叫ぶ

そのセリフは大人気ガン。ムシリーズのセリフだ

…しかし実際は花火を持って振り回し叫んでるだけなのだが

「それでも、守りたい世界があるんだー！！」

しばばば、とどことなくむなしく花火の音が響き渡る

「お嬢さま…、それはいい…」

ちょうど追加の花火を持ってきた泉と一緒にハヤテが帰ってきた

「むむ！」

気づいたナギが声を挙げて花火を一時中断しこちらを向いた

「おおハヤテか。すまんすまん、ちょっとア。ウズやプロ。イデンスと戦うのに必死になりすぎた」

わかる人にはわかる単語が並んだ

それにハヤテは汗を浮かべながら「はあ…」と苦笑する

「でもかつこよかったわよ、ナギ」

ナギの理解者、鷺ノ宮伊澄（ズラウさ付き）が笑みを浮かべて呟く

ときおりぴこぴこと揺れるズラウさ

「いや、ナギちゃんの花火芸は最高だぞハヤ太くん」

「ハヤ太くんもなにかやってくれたまえよ」

理沙と美希がなにか言ってるがハヤテは気にしない事にした

「よし！ 泉、我々も負けてられん！！」

「早速追加の花火で遊ぶんだ！！」

さらにテンションが上がる二人

彼女たちに自重という単語はないのかな…ないんだろうな、と一人ハヤテは内心呟いた

「けどお嬢さま、あまり危険な遊び方はダメですよ」

「わかっているさ。…けどこうやって、皆で遊ぶのも楽しいな」

「とうまとうま！！ すごいよこれ！ 光がぶあーって！！」

「わかったからあんまはしゃぐなインデックス…熱いつ！？ ちょ、インデックスこっちに花火向けぎゃあアああア！？」

「…本当に楽しそうだな」

「ええ、僕が言うのもなんですけど…不幸ですね、上条さんも」

「ハヤテには勝てんがな」

「ちょ、どういうことですかお嬢さま！？」

皆から少し離れた場所にアラタと美琴はいる

ある程度皆で花火を楽しんだ後、隙を見てこっそり抜け出てきたのだ

「なかなか刺激的な旅になったわね…、出会った人たちも個性的で楽しいし」

美琴が背を伸ばしながら言う

「確かに、メイドとかは舞夏くらいしか見てないからなー」

「舞夏はちょっと飛んでるからなあ…、マリアさんはホント非の打ち所のないパーペキなメイドさんだしねー」

あれがメイドか…、と心底関心した

「明日も楽しみ、ううん、旅行中は毎日楽しみだわ」

言って夜空の星を見る美琴

星の光に照らされた彼女の横顔は幻想的で魅力的だ

「…、」

思わずアラタはその横顔に見とれてしまった

「…ん？　どーしたの？」

怪訝に思った美琴がずい、とアラタの顔を覗き込んでくる

「っ…、い、いや別に？　なんでもない」

薄く頬を赤くしながらぷいと顔を背ける

「こら、こっち向きなさいよ。ほ…ら！」

ぐい！ と半ば強引に向けさせられた

美琴の顔が数センチまで縮まる

お互いの息が確かに感じとれる距離

「…そういえば、あれ以来してないね」

「…告白の時、一度しただけだからな…」

するとスルリと美琴が両手を首にかけて

「…じゃあ、する？」

顔を赤く染めて美琴が言ってくる

「見られたら…、どうすんのさ」

「…触れるだけなら、きっと大丈夫…」

顔が近づいてくる

本当にゆっくりと

「…強引だな、相変わらず…」

月明かりが照らす下、二つの影が重なった――

「…幸せ」

小さく呟いたその一言をアラタはしっかりと頭に刻む

アラタは美琴の体を優しく、それでいてしっかりと抱き締めた

「伊達ちゃん、どうなのよ一杯」

「お、悪いねえ」

こちらはオッサン二人組

伊達明は建宮齊字が持ってきたコップを受け取り、酒を注ぐ

「ほら、建宮ちゃん。どぞどぞ」

「こりゃこ丁寧に。…ととととと」

半分くらいまで酒を注ぎ、伊達と顔を見合わせて軽くコップをぶつける

そして一気にコップの中身を飲み干し

「ぶはあー!」「染みるのよな…!」

オッサンにしかわからない酒の旨味が口いっぱいに広がっていく

「いやー、海外で飲む酒は一味違うよなー」

「全くよ…。五臓六腑に染み渡るたあこの事だな」

再び互いが互いのコップに酒を注ぎまた飲み干す

「つまみが欲しいねえ…」

「そう言うと思って柿ピーを用意してきたのよ」

カバンをガサガサとあさり袋詰めにされた柿ピーを取り出した

「おっと…、建宮ちゃん、気が利くじゃないの」

「それほどでもないのよなー」

オッサン二人の酒飲みはまだまだ続く

少女は一枚の写真を見ている

それは三千院家の執事の写真だ

「…、」

少女はまだその写真を眺めている

その瞳に、どこことなく悲しみを潜ませながら

「その執事を倒せば、三千院家の遺産が手に入る…か」

少女…天王洲アテネは呟いた

「けどわかんないな」

白い髪の執事…マキナが言う

「何がです、マキナ」

「確かに三千院家の遺産はいっぱいだけど。アテネも十分お金持ちだろう？ それなのにまだ三千院家の遺産が欲しいって…そんなに金がいるのか？」

「……、ああ。そういえば遺産というのは、そういうものも含まれるんですね…」

「へ？」

その答えは全く予想していなかった

アテネの事だ

それなりに納得のいく、それでいてわかりやすい説明をしてくれる

とマキナは思っていたのだが…

「それよりマキナ。今客人はどちらに？」

「あ？ ああ…、客室に待たせてるけど…」

「そう。行くわよマキナ」

そう言っつてツカツカと歩いていくアテネ

「あ、待ってくれよアテネー」

そのアテネにトコトコとついてくマキナ

それをわかりやすく絵で例えるなら、ご主人を追いかける犬だ、もしくは猫

「んー…、ファーストフードも結構美味なることね…。このピクルスがなんとも…」

「普段はティーやケーキくらいしか食べないからな」

おまけにそれらはすべてクロスが作っている

そんなくだらない談笑をしていると扉が開く

そこには胸元が開いた黒いドレスを着た女性とその執事が歩いてきていた

「失礼。待たせたかしら」

「気にすることなし。はんばーがーなるものも頂けたことにつき満足の事よ」

「…、」

アテネは数分の黙った後

「…指摘していいかわからないけど、貴女の喋る日本語はずいぶん個性的ね」

「なー！こ、これは土御門がふざけりて教えたる事がそもその原因で…！」

「ローラ、それ以上言っな。アホに見えるから」

むう、と呻きながらすごすごと椅子に座り直す「最大主教」ローラ

「それで、わざわざ貴女方がこんなところに来た目的ってなに？単なる暇つぶしかしら」

「んー、確かにそれもありけるけど…。天王洲のやりし事に興味が湧きけりたからかしら？」

「…、」

ピク、とわずかに眉を動かした

その言葉だけでアテネには伝わったようで

「ふふふ…、面白いじゃない。…いいわ、帰るまでここに居ても構わない。…ただし、邪魔したら貴女も叩き潰すわよ?」

「どうぞ構わぬわ。見さしてもらうことよ、天王洲」

一口コーラを飲みながらアテネを見るローラ

「うぐ! しゅわしゅわしゅるのよくろすー」

「知るか、お前が頼んだんだろうが」
そんな二組が交差し、夜がふけてゆく…

「うわー…これがヌーディストビーチですかー!!」

翌日

ハヤテたちとアラタたちはナギらの案内でヌーディストビーチに来ていた

「けどヌーディストと言いながらヌードの人はいませんね」

「まあそうだな」

いたら大変である

「けどお嬢さまは、水着に着替えて泳がれたりはしないんですか?」

とハヤテは聞くが

「だからハヤテ。人は水に浮かない」

「あ、はい…そうでしたね…」

一蹴されました

「ふふ、しかし海というものには、なんかこうテンションが上がるな」

「ね」

「さて、早速泳ぐのではないか歩くん!!」

三人娘の一人、美希が西沢の手を掴み走り出す

「わわ!？ ちょっと、まだ着替えてないよ!？」

どたたたー!! と海に駆けていってしまった

「…元気ね…」

「だな…」

美琴と二人、そんな感想を漏らす

「あれ、そういえば桂さんは？」

「ん？ さっきあつちの林で見たけど…」

なんだかとぼとぼしていたが

「…綾崎、何かへましたのか？」

彼は何かと不幸です、とはマリアさん情報

流石に失礼と思いながらも直にハヤテに聞いてみたのだ

「そんなことないですよ。…。……………」

めちゃくちゃありそうだ

「…あるのか綾崎」

当麻の一言にハヤテは顎に手を当てて真剣に考え始めた

やがてハツとした表情になるや否や

「鏡祢さん、ヒナギクさんはあちらの林にいるって言うてましたよね」

「あ？ ああ、言ったけど…」

「わかりました！ 僕少しヒナギクさんのところに行ってきます！」

「！」

言ってハヤテは林の中に走っていった

「…上手く解決するといいな」

「本当にな」

当麻と二人、アラタは頷くのだった

「そついや今日インデックスとした？」

「はしやぎ疲れてまだ寝てる。…多分お昼過ぎまで起きないかもな」
確かに昨日ははしやいでいた

大好きな当麻と旅行、というのだからテンションも上がったのだろう

「私も水着持ってきてくりや良かったなあ」

「な。失敗したよ」

とりあえず皆で砂浜に出てみることにしました

しばらく経ってハヤテがとぼとぼ歩いてきた

「あ、戻ってきた」

「どうだったさ綾崎」

二人の問いかけにハヤテは浮かない顔をしながら

「…それが、その、なんて言うか…」

言いづらそうにハヤテは喋り始める

ヒナギクを見つけるまでは良かった

だがなんて声をかけよう…

そういえば最近の彼女はなんだかハヤテに何かを言いたげな…

（そうか…！ …ヒナギクさんは、何か僕に告白したいことがあるのかも…！？）

空回りする借金執事

「どうしたの？ ハヤテくん」

「…いえ、上手く言えないんですけど…ヒナギクさんは、ヒナギクさんは…」

拳をギュッと握り締めてハヤテは告げる

「…僕に、告白したいことがあるんじゃないんですか？」

「…は？」

最近なんでこうブツ飛んだことを聞いてくる人が多いのか

「こ、告白したいこと？」

ヒナギクが顔を赤くしながら聞き返すがハヤテは

「そうです！！ 何か僕に、言いたいことがあるんですよね！！」

真顔で（しかも真剣に）聞くハヤテ

（ええええー！？ な、なにこれ！？ なんでこんなことになってるの！？）

テンパるのも当然だ

（え！？ まさか私の気持ちバレてる？ けどならなんでこう変な聞き方！？ バレてるなら自分から言ってくれたって…！！）

「ヒナギクさん！！」

「は！！ はい！！？」

混乱しているヒナギクの気も知らず、真剣な表情でハヤテはヒナギクを問い詰める

「言ってください!! 言ってくれないとわからないこともあるじゃないですか!!」

「ああ、けどそんな…」

「ヒナギクさん!!」

「そんなこと言われたって…言えるわけないでしょバカアああアアアア!!」

叫びながら脱兎のごとく駆け抜けてしまった

「あ…。…ヒナギクさん…」

取り残されたハヤテはただ彼女の名前を呟くことしか出来なかった

「というやりとりがありました…、また何かヒナギクさんを怒らせるような事したんじゃないかと不安で…」

そう話すハヤテを見ながら若干冷や汗をかきつつ当麻とアラタは小さい声で会話する

「（な、なあアラタ。綾崎って、もしかして超鈍感なんじゃないか?）」

お前が言っな、という言葉をなんとか飲み込み言葉を返す

「（ああ。しかもハンパなく重度のな…）」

「…はあ…」

テンションの下がり具合が半端ではない

何か話題はないものか、と頭を回転させていると

「あ、そうだ綾崎。渡してくれって頼まれた奴があんだけど」

「？ はい、なんででしょう」

アラタはポケットから一枚の手紙を取り出し、それをハヤテに渡す

「手紙？ …帝おじいさまから…？ 鏡祢さん、この手紙を誰に…」

その質問には当麻が答えた

「んー…、たしか愛歌って人だよな」

「ああ、長くて綺麗な髪が印象に残ってるかな。…じゃあ綾崎、確かに渡したぜ」

軽く肩を叩いてアラタと当麻は戻っていった

と、入れ違いでナギが歩いてくる

後ろにはマリアも控えてる

「どうしたハヤテ」

「いえ…三千院帝おじいさまから手紙をもらって」

直後ナギは目をパチクリさせて

「三千院帝？ いったい誰なのだそれは」

「いやいやお嬢さま…。読者の皆様がそう思ってるからって…。まあとりあえず、読んでみましょう」

ハヤテは手紙の封を開けて中身を取り出すとそれを読み始める

「ごめんなさい帝くん、遅くなっちゃって」

赤坂ブ。ツツ

ライブが終わって小一時間

まだ火照った顔のめぐたんが裏口からかけてきた

「いや、全然待ってないよ」

そう答えたものの、待っている時間はまるで一生のよう感じるほど長かった

「でも今からの時間はお客さんの天使じゃなくて、帝くんだけの天使になりたい」

「ああ、そうだね。僕が君のオンリーワンさ」

そう、今から二人だけのライブが始まるのだ

「捨ててしまえー!!」

「ダメですよお嬢さま!! ダメですって!!」

「なんなのだあのジジイ!! なに考えてこんな自分主演のドリム小説を人に送りつけてきているのだ!!」

「わかりませんよ! けどほら!! まだ続きますよ!?!」

マリアが手紙を受け取ってその手紙の続きを声に出して読み上げる

「えーと…。『遺産相続の条件がわかりにくいと苦情が寄せられました。なのでここで、もう少しわかりやすくするために、皆様に新しい条件をお伝えしようと思います。遺産相続の条件は、三千院ナギの執事、綾崎ハヤテを倒し彼の持つ「王玉」という石を奪うか破壊すること』」

王玉という単語が耳に入った時ハヤテはハッとした

「『その石は三千院家の遺産を継ぐために必要なものなので、無くせばゲームオーバーです。どうぞよろしく』…ですって」

「…「王玉」って、これのことですよね」

ハヤテが首からかけてある王玉を二人に見せる

何気なくハヤテが見せたその王玉に二人は一瞬息を潜ませた

「え…なんでハヤテがその石を?」

「ああ、これは――」

その時だ

「クツクツク！！ その石を破壊すれば、遺産は私のものとなる！
」

「っ！？」

突如として現れたその男

「この私！！ ギルバートのものに――！！」

また波乱の予感である

海

それは青く広く、そして口に含むとしゃっぱいやつである

「そら！」

ばしゃあ！ と飛沫が海音に向かって飛んできた

「わぷ！ 千桜さん止めてくださいよー！」

海に入るといふ事を完全に失念していた二人は水着を持ってきていなかったのだ

だが着替えはあった

結果

私服のままズボンの裾をまくり上げ、そのまま海に入るといふ強行に出たのだ

「私だってびしょびしょだ、だからお互い様だよっ」

ばしゃあ、とまた喰らう海音

「あばっ、むー…僕だって！　でやあ！」

裸足の足を蹴り上げて飛沫を飛ばす

「うわ！　ま、まさか足を使ってくるとは！」

ワイワイキャピキャピする二人

…なんだろうこのバカップル

普段の千桜ならば絶対にこんな姿は見せないだろう

だが相手が海音で、おまけに二人きりという条件が揃うと枷が外れ、純粹に楽しんでしまう

「てやつ！…と、わわわ！？」

と水をかけようとした時千桜の足が波に取られて転びそうになった

「危ないっ！」

バツと海音が背を支える、が逆に二人の足がもつれて千桜が海音を押し倒す形になってしまった

無論海音は千桜が濡れないように自分からびしょ濡れになる構図を自ら取ったのだが

その反動でお互いの顔の鼻と鼻がスレスレの距離まで近づいた時はどれだけビックリしたか

「…えと、…その…」

「…かい…、とくん…」

互いの顔は茹でたタコのように真っ赤になってお互いの顔を見つめる

何も言えないのは何も考えられないから

否、全く考えがまとまらないのだ

何を言えばいいのか、どう気の効いたセリフを言えばいいかがわからない

「…じー」

三人娘が面白そうな顔して、瀬川が赤い顔してこちらを見ているのに気づくまでは

「…、」

海音と千桜の行動は早かった

びゅんっと離れて砂浜に座する二人

「ちーちゃんだいたん…」

「ち、違っ！ あれは…、そう、波に足がとられて…！！」

「そ、そうですよ！ 決してやらしいとかそんな意味あいはなくって…！！」

二人の弁解は続く

ドカァ！！

ビーチにそんな鈍い音が響き渡った

その数秒後ギルバートが砂浜にうつぶせでピクピク痙攣しながら倒れておりました

「それでお嬢さま、バイオらはクリアなさったんですか？」

「いやー結構ラストだと思うんだけどさー」

流石にこれはみつともない

そう思ったギルバートが食い下がる

「ま、待ちなサイー!!」

律儀に止まるお三方

「はあ…、それで。アナタ誰でしたっけ？」

やれやれといった様子を隠すまでもなくハヤテは聞いた

「クツクツク!! 我こそは三千院家の遺産を狙うラッキークロ―
バーズの一人、ギルバートです!! 貴様の持つ石を破壊し三千
院家の――」

ドカア!!

本日二度目の鈍い音

「だけど最近の洋ゲーはすごいですよねー」

「まあ日本のゲームとは開発費がケタ違いだからなー…」

ここまで殴れば諦めるだろうと三人は思っていたのだ

だが

「ふ、ふふふ…。そうですか、わかってはいたんですよ。…だが今

回のギルバートは違アアう！」

やかましく叫ぶギルバートをうつとうしく思ったナギは振り向いて「うるさいぞお前！ ハヤテにあれだけボコボコにされてまだ懲りないか！！」

「AゝHAゝ…、確かに今までなら大人しく逃げ帰っていた…、だが今回は…。その憎きボケ執事をボコボコにする秘策があるので…す…！」

「…なんです？ その秘策って」

その質問を聞かれたギルバートは待つてましたと言わんばかりにポケットから何かを取り出して見せつける

「これで…す…！」

どう見てもUSBメモリだ

一般と違うことはその表面に「U」というアルファベットが描かれているだけだ

「なんだそのメモリは。私とゲームで戦おうというのか」

無論私が勝つに決まってるがな、とナギは自信満々に付け足す

「これは…、こう使うので…す…！」

ギルバートがメモリについていたスイッチを押し、そのメモリを起

動させる

「UTOPIA」

「む？」

「…なんでしょう」

ハヤテは警戒し、ナギとマリアの前に立つ

何だろう、相手のあの自信には何かある…

「そいつ！」

言葉と共に掌にメモリを差し込んだ

直後信じられない事が起こった

ギルバートの姿が変わっていくのだ

左右非対称の金色のドーパント

「ユートピア」

「>はーはははー！！ 怖じ気づきましたか！？ 過去に大敗した恨み、今ここで晴らさせていただきまーす！！<」

その怪人を見たナギは

「な、なんだあれは！？ 特撮とかでよく出てくるような…」

「離れてください!!　マリアさん!　お嬢さま!」

ハヤテが臨戦態勢を取りながらマリアに促す

「は、はい!　ナギ!」

マリアがナギの手を引いて離れていく

「>ふん!　今用があるのはお前でーす…!　覚悟しなサーイ!<」

ユートピアが手に持ってロッドを構えてハヤテに接近する

「ふ…、はああ!」

勢いをつけた渾身の回し蹴り

人間体のギルバートならこの一撃でとっくに倒されていただろう

人間体なら

「>AゝHAゝ…、そんなもんですか?<」

全く効いていなかった

「な…!?!」

一気にハヤテの顔色が青ざめていく

「>本場のキックを見せてあげまーす!<」

シンプルな回し蹴りを腹部に喰らう

ギルバートとは全く違う、重い一撃

鈍器で殴られるよりはるかに強力だった

あまりの威力にハヤテは危機感を感じ直撃する瞬間後ろへ飛び軽減しようと試みたが、風圧で後方に飛ばされてしまった

ハヤテたちから少し離れた所

「ふふふ…。皇くんもすみに置けないなあ」

「だ、だから…その…」

「ちーちゃんもスッゴいかわいかったよー」

「だ、だから！」

そんな会話を交わす中に

バsshアン！！ とハヤテが吹っ飛んできた事には驚いた

「うわあ！？ ハヤ太くん！？」

「せ、…瀬川さんたち…、逃げて…！！」

「え…？」

ハヤテの視線の先を見る

そこに金色の異形の化け物がいたのだ

「な！ なにあれ！？」

「んー…、特撮の着ぐるみとかかな」

「いや、きつと特殊メイクだな」

呑気にそんな推測を始める理沙と美希を尻目に

「海音くん、あれって…！？」

「いや、イメージとは違う…！？ なんだあれは…！？」

身構える海音は電王ベルトを取り出そうとし

（！？ しまった！！ ベルトは部屋だ！！）

痛恨のミスを犯してしまった

「ハヤテーーーー！！」

聞き慣れた声が聞こえた

見ると先ほどマリアと一緒に逃げたナギが走ってきていたのだ

「お嬢さま！？ なぜ来たんです！！」

「執事が危ない目にあっているのに、呑気に逃げてなどおれん！」

ナギは勇敢にハヤテを守るように立ち、バツと両手を広げる

「…え、これってマジなのか？」

「…そ、そのようだ…」

状況を完全に把握した美希と理沙もただ呆然と立ち尽くすばかりだ

「これ以上！！ ハヤテには指一本触れさせん！！」

「>ふ…、美しき主従愛というヤツですか。泣けてきますねー。なら一緒に、始末してやりまーす！<」

ロツドを振り上げる

その光景を遅れて離れた場所に到着したマリアが目撃する

瞬間、青ざめた

「ナギ！？ ハヤテくん！？」

悲鳴がビーチに響き渡る

「>死になさーい！！<」

誰もが目をつむりかけたその時

「でえりやあああああ！！」

突如として現れた白い人影がユートピアを蹴り飛ばした

「>ぐあ！？<」

突然の出来事に危機感を覚えたユートピアは後方にステップし距離を取る

その白い人影とは

「か、がみね、さん…?」

「>貴様…何者でーす!?!<」

「私の友達が、世話になったわね」

「ひ、ヒナギク!?!」

アラタとは別にヒナギクも騒ぎを聞きつけ駆けつけてくれたのだ

「桂さん、皆を離れさせてください。多少離れば大丈夫なはずですよ」

「わかったわ。皆、急いで!!!」

ヒナギクがハヤテやナギたちに避難を促す

ダメージを負っているハヤテはヒナギクが肩を貸して移動させた

「…、さて…覚悟はいいかな、お前」

「>それはこちらの台詞です！！ 貴様こそ、覚悟はできてますかー！？<」

あくまで余裕を崩さずユートピアはアラタを睨む

「>そもそも貴様はなんですかー！！ あともう少しだったものを！ー！<」

その問いにアラタは口元に笑みを浮かべて

「ほら、ヒーロー物には付き物だろ。悪をやっつける正義の味方ってやつが」

言いながらアラタは腰にロストドライバーを巻きつけた

そしてスーツの内ポケットから右手でスカルメモリを取り出し

「>！？ 私と同じ…！？<」

「一緒にするな。…行くぜ」

スイッチを押してスカルメモリを起動させ左手で帽子を外す

>SKULL<

そして

「変身」

ロストドライバーにセツトし、一気に開く

風が吹き荒れる

砂浜さえ巻き込みかねない強風が

離れた場所でしたヒナギクたちでさえその風の強さに手で顔を庇ったほどだ

そして再びその場を見ると

「ナギ…、なに、あれ？」

「…あ、れは…！？」

驚愕

その単語しか頭に浮かばない

先ほどまでアラタがいたその場所に

白いマフラーをたなびかせ

黒いボディを基調とし、頭にはSのアルファベットが刻まれている

その者こそ

「さあ」

左手に持った白い帽子を再び頭にかぶり直し、右手をユートピアに突きつける

そして軽く右手を回して

「…お前の罪を数えろ」

仮面ライダースカルが堂々と君臨する――

チャプター6（後書き）

お気づきの方もいるかと思いますが、いくつかのイベントはカットしています

あしからず…

チャプター7（前書き）

廻る歯車

カット部分が多いです
ご了承ください

チャプター7

「はああああ！！」

スカルは一気にユートピアに接近しその顔面に蹴りを放つ

「>あばあああああ！？<」

盛大に吹っ飛んで転がっていく

そこでスカルは一つ疑問が浮かび上がった

（…手応えが、ない…？）

以前左翔太郎からユートピアドーパントの話聞いた事がある

簡単にまとめると手にしたロッドで、天変地異を巻き起こし、相手の希望を吸い取り自身の力にする、という話だ

（…なのにその力を使ってこない。…あれは、見かけだけのレプリカか？ …どっちにしろ、倒す事には変わりはない！）

スカルはドライバー左側のホルスターからスカルマグナムを取り出してユートピアに突きつけた

因みにドライバー左側のホルスターはアラタが自作して取りつけたものである

スカルマグナムの引き金を引く

ドドド！！ とマグナムが火を噴きユートピアの身体に直撃した

「>あだだだだ！？<」

声をあげながらそのまま膝をつくユートピア

「っし…、このまま終わりにしてやるぜ」

「>ぐ…、やります…ねー！！<」

突発的に動いたユートピアのロッドにスカルは反応出来なかった

「なに！？ ぐあ！」

ガキン！ 胸部に痛みが疾る

それが致命的な隙となったスカルは立て続けにユートピアの攻撃を受けてしまう

「>A～H A～、先ほどまでの勢いはどうしましたー？<」

「ち…、調子に乗りやがって…！！」

完全に防戦一方になってしまったスカル

どう切り抜ける？

スカルは攻撃を耐えながら頭の中でただそれだけを考える

「ちょ、ちょっと…、あれ何かマズくない？」

泉が慌てた様子で周囲に告げた

「た、確かに…、ピンチだな…これは」

美希が冷や汗を額から流しながら戦いを見守る

そしてどこか手に汗握る戦いを少年のような気持ちで、美希は眺めていた

一方ヒナギク

「ハヤテくん、大丈夫？」

「ええ…、なんとか…」

ある程度呼吸が落ち着いたら、しかし息は荒いままだ

「本当か？ どこか痛いところはないか？ ハヤテ…」

「ありがとうございます。お嬢さま…、けど、本当に大丈夫です…」

笑顔を交えて答えるハヤテにそれ以上の追求はできなかったナギは「そうか…ならいいが」と返す

「だけど、このままじゃ…」

ヒナギクは再度戦いに目をやる

そこには金色の化け物の攻撃に耐える白帽子の戦士

「…、私が、いくしか」

呼べば正宗は来てくれる

しかしハヤテがかなわない相手に自分が戦えるのか

（うつん！ そんな問題じゃない！！ 今ここで戦わないと…、また皆が…！）

「正むー」

『正宗！』と叫ぼうとした瞬間人影が隣を突き抜けた

「え、ちょっと！？ 貴方たち！？」

そこにいたのは

「悪い桂さん。後は俺たちに任せておきな」

「ええ、プロフェッショナルに任せなさい」

人影の正体は上条当麻と神那賀雫だ

「さ、始めましょうか上条先輩」

「わあってるよ、アラタを助けないと」

当麻はロストドライバー、神那賀はバーストドライバーを巻きつける

まず当麻

ズボンのポケットからアラタやギルバートと似たメモリを取りスィッチを押す

> J O K E R <

そしてメモリをロストドライバーにセットし一つ深呼吸

そして

「変身！」

ドライバーを開く

> J O K E R <

電子音が鳴り響き、そして軽快な音楽が耳に届く

そこに上条当麻の姿はなく、真っ黒なボディをした人物がいた

それが

「仮面ライダージョーカー」

当麻、もといジョーカーは右拳を握り締める

次は神那賀

神那賀はスカートから変身するためのセルメダルを取り出して右手でメダルを弾いて左手でキャッチする

「変身」

バースドライバー前面左側のメダル挿入口にメダルを入れてカプセルレバーを一気に回す

直後神那賀の身体を、リセクタプルオーブが包み込み、神那賀の姿を変えていく

「仮面ライダーバース」

神那賀ことバースはスカルマグナムと同型のバースマグナムを取り出してユートピアを狙い撃った

「>これで…、あばばば!?!<」

突如として別方向からの援護攻撃

「! 今だ!」

スカルはすかさず腹部に蹴りを入れ距離を取る

「はあああああ!?!」

スカルが離れたタイミングを見計らってジョーカーが全力で右拳で殴りつける

「>ぐうう！?<」

ゴロゴロと砂浜を転がるユートピア

「>ちつ…また邪魔が入りましたネー…、ここは戦略的撤退です
！!<」

ユートピアは背中を向けながら一気に逃亡した

「ああ!?! あの野郎逃げやがった!！」

ジョーカーが怒りを露わにして叫ぶ

「安心しろ。…美琴がいる」

ユートピアの目の前に短髪の女の子が立っている

「>そこをどきなサーイ! さもないと、痛い目を見ることに――
―<」

「痛い目見るのは…」

バチ!! と女の子の周辺から雷が迸った

「>な、なんですかこれは!?!<」

「お前だああああ!!」

女の子の掌から雷が繰り出されユートピアを縛り付けた

雷だ、めちゃくちやバチバチ鳴っている上、身体がとてつもなく痺れる

「>ぐ、おおお!!?<」

「アラタああああ!!」

名前を叫びながら三人がいる方向にユートピアを投げつける

「決めるぞ、二人共」

「ああ」

「任せなさい」

バーズはメダル挿入口に一枚メダルを入れてカプセルレバーを回す

>クレーンアーム<

>ドリルアーム<

神那賀バーズが良く使う組み合わせだ

「せりゃああああ!!」

クレンドリルアームを伸ばし宙を舞うユートピアに当てていく

四回ほど攻撃を当て、五回目はドリルアームを解除し、クレーン単体にして巻き付けて

「上条先輩!!」

「よし来た!」

ジョーカーは一気に駆ける

走りながらジョーカーメモ리를 抜き取り、右側のマキシマムスロットに差し込んで軽くポンと叩く

> J O K E R M A X I M A M D R I V E <

右手に紫色のオーラが浮き出て力が溜まっていく

「そりゃああああ!!」

バースがジョーカーのところにユートピアを落とす

ジョーカーはタイミングを計って

「はああああああ!!」

ライダーアッパーカットをブチ当てる

「アラタ!!」

「おうさ」

答えるや否やスカルは跳躍する

跳躍しながらジョーカーと同じようにメモリをマキシマムスロットにセットしてポンと叩く

>SKULL MAXIMUM DRIVE<

そして離れたところにいる美琴に目をやる

頷くのが見えた

二人の間に見えない絆が引かれた瞬間

「ライダーキック…」

身体から溢れ出す紫色の波動を、蹴って撃ち出す

アラタからサインがあった

美琴はポケットからゲームセンターで良く使われるコインを取り出した

美琴の周りからまた雷が迸る

「見せてあげるわ…、超電磁砲を」

掴みあげる

「おい、このメモリをどこで手に入れた」

「わ、わかりませーん…、朝起きたらこのメモリが…」

（…起きたら？ 自然にあつたってのか？）

いろいろと思うところはあるが

「まあとりあえず…、今後綾崎らに手え出すもんなら、ツブすぜ？」

もはや軽い脅しである

「で、ですが…」

「ん？ 聞こえないなー」

余談だがスカルマグナムを顎に突きつけています

「わかったな」

「…わ、わかりました…」

ギルバートがガタガタ震えていたのは言うまでもない

「綾崎、大丈夫か」

変身を解除し三人は皆のところに駆け寄る

「はい…、ありがとうございます…」

だいぶハヤテも回復したようだ

「そうか。なら良かった…」

「な、なあ」

ハヤテの無事を確認したとき不意に美希がアラタに声をかけた

「ん？ なに？」

「さ、サインくれないか」

軽く頬を赤くしながら言われました

「え？ いい、けど…」

その後色紙を渡されたアラタは三人娘の分のサインを書いてあげました

「さっきは本当にありがとうございました」

改めてハヤテから礼を言われる

「気にするな。礼を言われるようなことはしていないさ」

柔和な微笑みを浮かべて返す

「そんな。鏡祢さんのおかげでお嬢さまの遺産を守ることができました」

遺産？

気になる単語を聞いたが色々と深そうなので、聞くのは止めておいた

「そついや、桂さんとは話したのか？」

「あ、はい…。その、結論から言うと、ヒナギクさんを食事にお連れすることになりました」

「話が全く見えねえよ」

突発的すぎて何にも情報が掴めませんでした

「いえ、日頃を込めてですね…」

まあなんとなくわかった

わからないけど

「まあだいたいわかった。つまり綾崎は、常日頃お世話になってるから、そのお礼を込めて食事にお連れしようって事だよな」

「はい、掻い摘んで言うと」

ハヤテは苦笑いする

…なんなんだこの会話は

「僕…、ヒナギクさんには毎日迷惑ばかりかけていて…、すごい嫌われてるかもしれないけど…、せめてお食事のときだけは喜んでいただこうと思うんです」

空を見上げながらハヤテは呟いた

「…、」

その発言を聞いたアラタは

（何なんだこの超鈍感男はアアアアア！！）

心の中で大絶叫

（なんでだよなんでこんな純粋で純朴で人畜無害な人間がなんでこんな勘違いしてるの！？ むしろなんで気付かないのよ！！）

思わずオネエになってしまふほどに心中は大混乱するアラタ

（端から見てもわかるじゃない！！ 会ったばかりの俺が言うのもなんだけどモツテモテじゃないモツテモテ！！ 不運すぎるわ悲しすぎるわ世知辛すぎ切なすぎイイイ！！）

「鏡祢さん？」

「はい！？ 何かしら！？」

「かしら！？ 鏡祢さん何かおかしいですよ、なんで急にオネエになってんですかー！」

「お。…おう、悪い、取り乱した」

一通り落ち着いたアラタ

「まあ俺は何とも言えないけど…、頑張れよ」

「はい！ ありがとうございます！」

そう言つてハヤテを応援し、アラタは一度宿へと戻っていった

「うー…、飲みすぎた…」

「気持ち悪いのよなー…」

宿に帰ると伊達さんと建宮さんがグロッキーになっておられました

「あ、アラタさん。お帰りなさい」

紅司ちゃんと咲良ちゃんが出迎える

「ああ、ただいま。…何やってんの？」

「いえ…、あの…。二人とも飲みすぎてしましまして…」

ハメを外しすぎたのか

アラタは苦笑を浮かべて伊達さんと建宮さんを見る

…こうはなるまい

アラタは心の中でそう誓った

とりあえず自分たちの部屋に戻り、荷作りをする

遅れて当麻や美琴、神那賀も戻ってきて、同じように荷を作る

「明日からどこ行くんだっけ？」

「んつと…、アテネってところらしいよ、わかっているのは地名くらいで…」

神那賀、美琴のガールズトーク

それを耳に入れながらアラタと当麻もトークを交わす

「いやー…、一時はどうなるかと思ったけど、無事に過ごせて良かったなー…」

「全くだ…。やっぱり海外旅行ってのはこうあるべきなんだよ…」

一通り荷を作り終えた四人は荷物を部屋に隅にやる

「ねーねー、そっちはなんか見つけたー？」

「トークしましょうよトーク」

夜がある程度明けるまでは、四人はガッツリトークをしてました…

…歯車が、まわる。また一つ、音を立てて

「…鷺ノ宮家のご令嬢と出会ったとは。…何とも偶然とは思えませんね」

神袞火織

「…？」

鷺ノ宮伊澄

なぜこの二人が会合したかと言うと少々長くなるかもしれない

簡単に言うとステイル、齊堵、神袞の三人でウォーキングしている
とタバコが切れた、とステイルが行った

しかしステイルは未成年なので一人ではタバコは買えないから、齊堵について行ってもらっている

二人を待つ間何をするでもなく、ただ立って待っていたのだが

ふと自分の前を蝶々を追っかけていた鷺ノ宮伊澄と遭遇したのだった

「貴女は…？」

「失礼。申し遅れました、伊澄嬢。私は神袈火織と申します」

「神袈さん、ですか…。とってもカッコイイ名前ですね」

「そ、そうですね？　ありがとうございます」

そんな偶然で、二人は出会った

「で、なんなんだ。あの子は」

齊堵と二人前を歩く伊澄を見ながらステイルは神袈に聞いた

「知りませんか？　僅か齡十三歳のゴーストスイーパーの話を」

「ゴーストスイーパー？」

「天草式でたまにその話題が挙がるんですが、なかなかの腕らしいですよ」

そのまま話を続けてく

「なんでも鷺ノ宮家の女性に代々伝わる秘術、「術式・八葉」を受け継いだ光の巫女です。…ただ、恐ろしいほど迷子になる確率が高くて、ふと目を離すと北海道ににいるという噂も…」

「…彼女はマジックの天才なのか。テレポート能力なのか？「術式・八葉」とは」

「…それはないと思いますけど…」

しかし断言もできない

神袈は苦笑いを浮かべるしかなかった

「しかし実力は相当のものだと思いますよ。あの年齢で、あれほどの力を継承しているのですから…」

齊堵と世間話をしている伊澄を見て

どこことなくインデックスを思い浮かべてしまった

「…やれやれだな。全く」

「ええ。…あんな女の子が、陰で戦っているのは…、胸が痛んできますね…」

一足はやくアテネ市

ここに一組の男女が練り歩いている

「アंकちゃんアंकちゃん、ここもキレイだよー」

「姉貴…、お願いだからハシャくな。…無理だな」

男の名は、アंक

金髪で軽く前髪を跳ねており、白を基調とし、右手側は若干赤が入ったジャケットを着用、ズボンはシンプルでどこにでもある布のズボンを着た一見不良のような姿だ

一方姉貴と呼ばれた女性も名をアंकという

下着に白いワンピースを一枚着たその姿は見るものを全て魅力する美しさを兼ね備えている

おまけにスタイルも抜群だ

「たまには海外もいいよねえー」

「いや、俺たちが住んでる場所は海外なんだが…」

「とにかく色々見て回ろうアंकちゃん!! それ行けー!」

どたたたた!! とアंकレディは走って行ってしまった

「…手間のかかる姉貴だ。…む?」
視線を感じた

姉であるアンクレディはすぐ見つかるだろうから放置、その視線の元を探しにかかる

「…、」

後ろの建物の曲がり角

確実にそこにいる

「…、」

ニイ、と口元に笑みを浮かべゆっくりと近づいていきそして

「なにコソコソしてやがる!」

バツ、と曲がり角を曲がって怒鳴り散らした

「!」

見ていたのは男だ

無精ひげを生やし、薄汚れたトレンチコートを着ている

「なんで俺たちを見てたのか、訳を聞かせて貰おうか」

右手を赤い籠手へと変化させゆっくりと歩み寄っていく

「…く!」

> MIDASU <

男は手に持っていたメモリを作動させて手の甲に差し込んだ

「なに!？」

男は姿を変えていく

顔は骸骨、首から下は昔の貴族のような服を着た、しかし手や足など見えているところは全て骨だ

「ち…、面倒なヤツだ」

アंकは愚痴りながらも腰にオーズドライバーレプリカを腰に巻きつけた

レプリカと言えどアंकが改良を施してあるので性能は本物と大差はない

すでに三枚、メダルは入っている

アंकはだるそうに右手でオースキャナーを持つと

「変身…」

一気にスキャン

> TAKA! KUJAKU! CONDOR! <

> T A a a J A a a D O R U u u u ! ! ! <

オーケストラのコーラスのような声が響きわたった

紅蓮の炎が辺りを包み込み、その灼熱の中から

「そおらああああー!!」

アंकタジャドルが現れ、謎のドーパントに殴りつけた

これがアंकの変身体

アंकタジャドルだ

見た目ははつきり言ってタジャドルコンボと大差はない

しかし右腕がアंकのものとなってることが最大の相違点だろう

「一気に叩き潰してやる…!!」

アंकタジャドルは一気に走り寄って謎のドーパントの腹部を蹴りつけた

のけぞる相手に対し、追い討ちとして両手を組んでハンマーパンチを与えダウンを奪う

「なんだ、こんなもんか？」

頭を掴み上げ、そのまま右腕で殴り、吹き飛ばす

「さあファイナーレだ…!!」

アंकタジャドルは左手にあるタジャスピナーを展開し、そこにセルメダルを三枚セットして閉じる

そしてオースキャナーでスキャン

>GIN! GIN! GIN!<

>GIGASCAN!<

「そおらああああ!!」

左手から銀色のエネルギー弾を炎を交えて撃ち出した

「!!」

謎のドーパントはバツ!! と両手を突き出し

ドオオン!! と直撃した

「…はん、案外呆気ないな」

変身を解除したアंकは爆発した場所に歩いて壊れたメモリを探してみた

現物を見るのは初めてだが倒されたメモリは人間から摘出され、碎けるという知識はあった

だから碎けたメモリを搜したのだが…

「…ないな」

数分地面を見続け搜したが欠片すら見つからない

と、足に何かがぶつかった

目をやると何か金色の物体が転がっている

「…金？」

手に取って吟味する

手触り、重さ、輝かしさ

どれを取っても確実に金だ

「バカな、この周辺に金なんて…、ん？」

その金の形に違和感を感じた

この形は…

「…アイツ、俺が撃った弾を金にしやがったのか！？」

しかし爆発までは金には出来なかったようで、その隙に逃げたようだ

「…ち…！！ 厄介な力だ…！！」

アंकは憎々しげに舌を打ちながら姉を搜索しに歩き出した

——また歯車が回る。——
一つ一つ、確実に、しっかりと——

チャプター 8 (前書き)

神の名を持つ運命の島

チャプター 8

「海音くんもうっかりミスはするんだね」

苦笑いしながら千桜に告げられる

「…すみません、浮かれてました」

完璧に失態だった

千桜とのこの旅行が純粹に楽しくて完全につつつを抜かしていた

「…気を落とさないでくれ海音くん、その、私じゃ何とも言えないけれど…」

「はい…、大丈夫です」

キリッ、と気を取り直して

「ところで、あのライダーはなんなんだろうね…」

千桜が呟いた

「うん。僕も見たことないです…、あんなライダー…」

海音は全く見覚えのない仮面ライダーに動揺を隠せない

「…だけど、今回はあの人たちがいてくれたから助かったけれど…
またあんなミスしたら…」

「こら、またマイナスに考えないの」
ポカリ、と頭を叩かれる

「あう。…なにするんですか千桜さん…」

「すぐマイナスな方向に考えるから。…旅行はまだあるんだからね」

そう言つてぶくー、と頬を膨らます千桜

その様子が可愛くて思わず笑ってしまった

「ちょ！　なんで笑うの！」

「ごめんなさい…、その、可愛くて…」

「にゃ！？」

不意打ち気味に、というか完全に不意打ちだ

「か、かかかか可愛い…、て…へへ…」

一人自分の世界に浸る千桜を微笑んで見守りながら海音は荷を作り始める

「…しばらくは帰ってこないかも。あ、デンライナーも用意しないと…」

今日も賑やか(?)なお二人だった

ヒナギクは船の上で思い出す

先ほどの砂浜での事だ

ハヤテの傷も癒えてアラタが三人娘にサインをせがまれてる中ハヤテがふと呟いた

「そういえばヒナギクさん、さっきの件なんですが…」

「さっきのつて……あ…」

思い出した

自分は数分前この人になんか凄まじい話をしてたではないか

具体的には告白がどうか

「そー！！ それはダメエエー！！」

言うや否やヒナギクは脱兎はおるか加速装置を発動した島。ジョー並のスピードで逃げ出してしまった

「ヒナギクさんっ！！」

また出遅れてしまった

どうしようか、と唸っていると

「追いかけてこい」

ナギの許可が降りた

「ヒナギクにはいつも助けられているしな。こういう時にお礼してやらないと」

「…はい！ わかりました！！」

（…そういえば、まだ何も解決してなかったわね…）

とぼとぼと歩く

どうしたものかと悩んでいると

「ヒナギクさん！」

ハヤテが追いついてきていた

「は、ハヤテくん…」

「はは。そんなに逃げないでくださいよ」

彼がそばにいただけで体温が上昇する

頬が熱くなってしまう

「それで…さっきの件なんです…」

「待つて!!」

顔が更に赤くなる

確かにハヤテに告白させるとは言ったが…

「私、自分から言っなんて事…!!」

「わかってますよ…。だから前々から思っていた事を、僕に言わせてください!」

「ええ!?!」

そんな…まさか…

「ヒナギクさんは、もっと羞恥心を持つべきです!」

予想の百八十度違った告白でした

「…は?」

「初めて会った時のスパッツの件とか。いくらなんでもヒナギクさんは無防備すぎます、ですからもっと女の子としての自覚を…」

「ねっ」なんて言葉を言いながら肩を叩かれる

イライライライライライライライライラ

ぷちっ

とりあえずハヤテをとっちめてやりました

「そ、れ、で。なんでわざわざこんな所でハヤテくんの説教聞かなきゃいけないわけ？」

「い、いえ、別に説教だなんて…」

「全く…余計なお世話よ…」

なんだか期待してしまつて損した

「まあ確かに余計なお世話なのかもしれませんが…ヒナギクさん、自覚ないから心配なんですよ…」

自覚？

「自覚ないって、なんの自覚よ」

「ですから、その…、自分が

「可愛い女の子」
だっていう自覚が…」

「……………。え？」

可愛い…女の子

「ヒナギクさんとはとても可愛くて魅力的なんですよ。なのにそんなに無防備なのは、やっぱり周りの男の子はよくないっていうか…、聞いてます？」

「へ！？ な！ 何よ！！ それこそ余計なお世話よ！！」

「す、すみません…」

（ダメだ…また怒らせてしまった…。ちゃんとお礼しないとイケないのに…困った…）

とハヤテが肩を落としている時ヒナギクは

（ど、どうしよう…！？ う、嬉しくて、顔元に戻らない…！！）

ニヤける顔を抑えるのに必死だった

そりゃあそうだろう

好きな人に『可愛い』と言われて嬉しくない人がいないわけがない

（だ、ダメよヒナギク！ こんなニヤけた顔ハヤテくんに見られた

ら、それこそ恥ずかしくて死んでしまう…、だけど嬉しくて顔が…)

口元を押さえてふるふる震えるヒナギク

(うう、何だろう…この長い沈黙は…。これは相当怒ってらっしゃるのか…?)

しかし、お礼はしなくてはいけない

ハヤテは意を決して声をかける

「あの、ヒナギクさん？」

(と！ とにかくここは、頑張って表情を作らないと…！)

と、頑張って表情を作った結果

「あゝ？」

めちゃくちゃ険しい顔になってしまった

「！…！」

これはかなり怒ってる！？

そう感じたハヤテは即座に謝罪

「すみませんすみません！！ まさかそんなに怒っていたなんて！
！」

「べ、別に怒ってないわよ!!」

「け、けどだったらなんでそんな険しい顔を…!!」

「そ、それは…!!」
ぎゅるるるる…

何とも間の悪いタイミングでヒナギクのお腹が鳴った

『…』

長い沈黙

やがてハヤテが言った

「…あ、お腹が空いているからそんなに怒っているんですか？」

「…!!」

凡ミスする執事（鈍感）

「私は小学生かバカー…!!」

絶叫しながら、しかも恥ずかしさもあいまってまた高速でヒナギクが逃げ出した

（く…いつも肝心な所で逃げられてばかり…!! だけど、今度こそ…!!）

「待ってください、ヒナギクさん！」

ハヤテは駆け出した

桂ヒナギクは全力でその森林を駆け抜けた

理由は一つ、好きな人にお腹の音を聞かれたからだ

（こんなんじゃないあもうカッコ悪くて…ハヤテくんに合わせてる顔が…！！）

「ヒナギクさん！！」

執事は早かった

ヒナギクの思考の隙に差を詰めてきたのだ

「なあ！？　なんで追いかけてくるのよ！」

「ヒナギクさんが逃げるから！」

「子犬かー！」

そんな問答を繰り返すがスピードは全く変わらない

だが顔をハヤテの方に向けながら走っていたために前方を見ていなかった

「ヒナギクさん！！　前！！」

だから

「え？」

崖の存在に全く気づくことができなかった

「あ……！！」

頭が真っ白になる

高所恐怖症ということもあってか怖さが尋常ではない

真下は海

しかしその周囲にはまばらな岩

打ち所が悪ければ……

マイナスな面しか考えられない

そのまま身体が落下する——

「ヒナギクさん……！」

ザーン、と波が打つ音がする

「ふうー…」

聞こえたのは安堵の溜め息

間一髪ヒナギクを救出したのだ

見た目的にはハヤテがヒナギクを押し倒したみたいだが

「大丈夫ですか？ ヒナギクさん…」

頬が熱くなる

心臓がバクバクと鼓動が早くなる

ハヤテの顔が目の前に…

「危機一髪だったわね」

聞き慣れたその声に超覚醒

バツ！！ と二人は背中合わせに正座した

「あー！！ 愛歌さん！！ なんでこんなところに！？」

「そりゃ眺めが良いからティータイム中よ」

まさかの偶然である

「というかあなたたちこそ何してるの？」

最もな疑問である

「や、これは…!! その…、日頃ヒナギクさんに助けられてばかりなのでそのお礼に…」

「後ろから抱き締めて愛を囁いてやろうと…」

『ちがいます!!』

全力の否定

パツと見て勘違いしそうな体制ではあったのだが

「だけど、どういいうお礼をしたら喜んでいただけるか、わからなくて…」

ハヤテの言葉を聞いた愛歌はティーカップをお皿の上に起きながら

「…。綾崎くん、ギリシャには女の子を喜ばせる鉄板のデートコースがあるのをご存知？」

「え？」

「ギリシャのアテネ市には丘の上から市街を一望できる「サンライズ」という高級地中海料理店があるの。そこは眺めは最高、料理も最高というまさに女の子を喜ばせるためにあるような理想のレストラン…」

再び愛歌はカップを持ち

「そのディナーに招待すれば…！　たいていの女の子は喜ぶ仕組みになってるわ！」

「ほ、ホントですか！？」

「もちろん、そこのおむずがりの生徒会長も例外ではなくってよ」

「誰がおむずがりよ…！」

しかしその会話に希望を見いだしたハヤテはまた愛歌に何かを言うとする

「じ、じゃあ…！！」

「だけど、その店。高いわよ」

地上に叩き落とされました

ていうか絶対そうだろうとハヤテは内心予想してたほどだ

「私の名刺を使えば普通は予約すら困難なその店の、最も眺めが良
いVIPルームが無条件で使えるけど…」

愛歌は名刺を取り出しながら

「貴方にこれを受け取って、心からの感謝を示す事が出来て？」「自腹」で」

愛歌がハヤテを見る

ハヤテはやがて、静かに愛歌の名刺を受け取った

その表情は決意を纏った戦士の顔

「先日入った喫茶店のバイト代…、あれをすべて使って…ヒナギクさんへの感謝の気持ちを表したいと思います」

そう凛々しい声色で告げた

「…ハヤテくん」

ほんのり赤くしながらハヤテを見るヒナギク

その様子を見た愛歌は「ふ…」と軽い笑みを浮かべて

「それでこそジェントルマン…」

健闘を祈るわ…

ありがとうございます、愛歌さん…

いえ、ラブ師匠…！！

なんだかよくわからないやり取りだった

「…ちゃんと、美味しいものを食べさせてよね！」

空気を変えるためにヒナギクは言う

「へ？」

「ちゃんとエスコートしてよね！」

「ヒナギクさん…」

「た、楽しみにしてるんだから！！」

青空が映える中、赤い頬のままヒナギクが言った

ハヤテはその言葉に微笑みかけて

「はい！ おまかせください！！」

とても、頼りになる声色だった

と、まあこんな事があったのだ

「…むー」

唸ってみる

何も浮かばない

「…ディナーかー…」

ちょっと顔がニヤける

好きな人と二人っきりで食事

これをワクワクしないというのも無理な話だ

と、完全に上の空だったのでほっぺに冷たい感触が来た時はビックリした

「わひゃあ!？」

「なに黄昏てるのよ、桂さん」

振り向くとオレンジジュースのコップを両手に持った御坂美琴が立っていた

「考え事？」

はい、と言った様子でオレンジジュースを渡してくる

ヒナギクはありがとう、と応えながらオレンジジュースを受け取った

ひんやりしていて気持ちがいい

「ま、まあ…考え事かなー…」

手にしたオレンジジュースをちびちび飲んで言う

そしてふと思う

(…御坂さんに恋人っているのかしら)

幸いこの場所には美琴とヒナギクしかいない

他のメンバーは広めの甲板でパーティー中だ

ヒナギクは思い切って聞いてみる事にする

「ね、ねえ御坂さん」

「ん？ なに？」

隣で同じようにオレンジジュースを飲む美琴に意を決して

「み、御坂さんは、その…、好きな人って…、いるの？」

軽く頬を赤らめながら美琴に聞いた

すると

「いるよ」

ものすごく普通に返ってきた

「は、早いわね…」

「桂さんだっているんでしょ？ 綾崎さん」

「!？」

バレてる!？

会ってまだ間もないというのに

「な、なんでわかったの!？」

「いやいや…。バレバレよー」

ふふふ、と笑いながら美琴は言った

「む、むー…」

唸るしかできなかった

やがて落ち着きを取り戻したヒナギクは気になった事を美琴に聞いてみる事にする

「…御坂さんは、告白とかしたことあるの？」

「あるよ」

「そう…、あるんだ…。…ええ!？」

予想の斜め上に行く答えだった

「…、」

「…あれ、桂さん？」

なんだかずーん、とヒナギクが落ち込んでいた

「…御坂さんは、どうして告白しようと思ったの？」

純粹に、そんな言葉がヒナギクの口から御坂に届いた

「…。私ね、最初はその人の事、意識なんてしてなかった。単なる仲が良い男友達だってそう思ってた。自分に言い聞かせてた」

やがて遠い何かを見る美琴

ヒナギクは静かにその話を聞く事に集中する

「けどいつしか気づいたの。私は、あの人の事が好きなんだって…。だから告白しようと思ったんだけど…、ある事件で、その人と、離ればなれになっちゃって」

「離れ、ばなれ？」

「うん。…泣いたわ、なんでもっと早く言わなかったんだろって。後悔したわ。…本当に」

「…、」

彼女はこの年齢で凄まじい出来事を経験している

その人に、告白するまでが、どれだけ長い道のりだったのかヒナギクにはわからない

「まあ、その人はだいたい二ヶ月後に戻ってきたんだけど」

意外に早かった

「だけどね、それでやっとわかったんだ。想いって、言葉にしないと伝わらないんだって」

「…そうね…。…うん」

どこことなく、ヒナギクは御坂美琴という少女の強さを知った気がした

「…なんか、長々話してごめんね…。えへへ」

「そんなことないわ。…すごく、タメになった」

ヒナギクは笑顔で美琴を見た

「そう？　なら、良かった」

同じように笑顔で返す

「さ、パーティーに行きましょ、瀬川さん達が王様ゲームするって言ってたから」

「…それはまた、騒がしくなりそうね…」

また楽しいパーティーが始まる…

デンライナー内部

進路はアテネ市だ

割と自動操縦に対応してるあたりデンライナーは割とハイテクだ

本来ならイマジン四人が色々な所に座っているのだが、今回は気を遣って海音のペンダントにこもっているのだ

「どうぞ、千桜さん」

ことり、とテーブルにチャーハンを置く

「…海音くんって、割と何でも出来るよな」

レンゲを持ちチャーハンを崩しながら千桜が言った

海音は結構料理が出来る

時たま世話になってばかりじゃいけないと海音が料理を作ってくれた事があった

そのときはシンプルな料理——白米に味噌汁、サバの味噌煮と和テイストだったが…

絶品に美味しかった

白米のちょうど良い硬さ、お味噌汁の絶妙な塩加減、味噌煮の美しいフォルム（？）

今まで食べたもので最高に美味しかった

「そんな。ちょっとかじった程度ですよ」

> かじった程度、ねえ。どう思う？ ハルちゃん<

エコーがかったその声は海音の契約イメージの一人、「ウラタロス」だ

「同年代の女性が聞いたら卒倒するな」

> ねえ<

「ええ！？ ちょっと二人共！？」

たまにいじられる

それがいつもの日常

アテネ市

「すげー！！ ここがアテネかー！！」

上条当麻のテンション最高潮

「申し訳ありません。我々の宿泊も認めてくださって…」

「いえいえ、お気になさらないでくださいな、神袈さん」

近くでは神袈とマリアが話し合っていた

さすがに夜も遅いしどうせなら皆泊まってけとナギが言ったのだ

断る理由はないので遠慮なくあやかろうということになったのだ

とりあえず本当に夜が深いので、部屋へと案内されて、軽くシャワーを浴び、床についた

夢を見た

それは過去に出会った最愛の女性

十年前に出会い、心を交わした、その女の子

あの日から十年

綾崎ハヤテは寝付けずにベッドから起きて部屋から出た

夜空が見える大きめのベランダ

そこに綾崎ハヤテは立っていた

あの日、止まったままの時間は

再び動くときは来るのだろうか

「なに一人でたそがれてんのよ」

声が聞こえた

後ろを向くとそこにはヒナギクが立っていたのだ

「ヒナギクさん…」

「どうしたの？ 一人で夜空なんか見上げて」

「い、いえ…、ヒナギクさんこそ、なんで」

「私は船で居眠りしちゃったから、そのせいで、眠れなくなっちゃって…。ハヤテくんも眠れないの？」

「ええ…ちょっと考え事を…」

ハヤテは応える

「考え事って？」

ヒナギクが聞く

ハヤテは軽く夜空を見上げて、呟いた

「「アテネ」っていう名前について…」

やけに落ち着いて

「この星で、最も偉大な女神の名前だなぁって…」

ただそれとなく、ハヤテは言った

そこに数瞬の間が入りそして…

「くす、っはは」

ヒナギクの笑い声がハヤテの耳に入ってきた

「はは、真顔で何言うかと思ったら。やーねーもう…」

「…え？ な、なんで笑ってるんですか？ ヒナギクさん」

「だってハヤテくんったら…急にそんなこと笑っちゃうに決まってるじゃない」

言っている意味がいまいち理解できなかった

だからハヤテは聞いた

「…なんでですか？」

「なんでって、そりゃあそうよ」

ようやく笑いが引いてきたヒナギクがハヤテに向き直って言葉を紡ぐ

「だってそれ、天王洲さんの口癖でしょ？」

ハッキリと自分の心臓の鼓動が聞こえたような錯覚を覚える

止まったままだった時間が、また動き出す音が聞こえた気がした――

神の名を持つ、運命の島で、繰り広げられる、一つの物語が始まる――

チャプター 9 (前書き)

再会する運命の二人

チャプター 9

「天王洲、さん…？」

その名前を聞いて聞かない訳にはいかなかった

「そうよ、ハヤテくんだって知ってるでしょ？」

笑みのまま彼女は告げる

「天王洲アテネさん。我が白皇学院の、若き理事長さまよ」

鏡祢アラタはふと目が覚めた

「…ん」

理由は特にない

強いて挙げるなら何か不穏な空気を感じたからだ

というかそれが理由か、と一人納得する

「…外の空気でも吸いにいくか」

とりあえず部屋の扉を開けて廊下に出る

「…さすが夜。寒いな」

眠気が飛んでしまった

どうせならガッツリ着替えて行こう

ピツとスーツを整えて白いソフト帽をかぶる

最初は着るのに時間がかかってしまったが、すっかり手慣れた今となっては文字を書くようにスムーズに着こなせる

自分で言うのもなんだが、割とカッコイイと思うのだ

「ハヤテくん？」

桂さんの声だ

船の上で居眠りをしていたから、眠れずに起きてしまったのだろう

「桂さん？」

「あら、鏡祢くん…。貴方も起きちゃったの？」

歩き回っていたのか若干額に汗が見える（本当に注意して見ないとわからないが）

「そんなところです。桂さんは？」

「私もそんな感じ。ほら、私船で居眠りしちゃったから」

予想の大半が当たってしまった

「それで、綾崎を捜してるみたいですけど」

「ああ、そうなのよ。…少し天王洲さんの話をしたら急にいなくなっちゃって…」

「天王洲さん？」

聞き慣れない名前だ

「うん。白皇には飛び級で卒業した人がいてね、その一人が天王洲アテネさんっていう人で…」

どんだけレベル高いんだ

アラタは心にダメージを負いました

「その人の話をしたら、ハヤテくんどこか行っちゃって…」

「どこか、ですか。…むー、とりあえず俺外回ってみます。桂さんは入り口辺りで待っていてください」

アラタは言つと廊下を小走りで駆け始めた

「あ、鏡祢くん!？」

ヒナギクの声が聞こえたが、あえてアラタは無視した

… なにか嫌な予感がするのだ

少し昔の話をしよう

ハヤテがまだ小さかった頃の話だ

学校の給食費が盗まれたと噂がたった

クラスメイトはハヤテを当然疑った

しかしハヤテにはそんな覚えはない

放課後、その事を父に話すと

「盗んだのは父さんだ」

軽い調子でそんな事を言う父親がどこにいるのか

そのとき、初めて自分の心がガラガラと音を立てて碎けるのを知った

ハヤテは走った

ただただ走った

車道に出たかもしれないし信号も無視しただろう

ふと気がついて倒れこむと、そこはどこかの花園だった

天国？　一瞬思ったがすぐに否定する

行く場所も帰る場所もないハヤテにはもう立ち上がる気力もなかった

そこで思った

「僕なんか、いつそのまま死んでしまえばいいんだ」

「ダメよ。そんな悲しいことを言うては」

否定する声があった

その声色は暖かくて、優しくて…

そして何よりも嬉しかった

「一人じゃ無理なら…左手くらいなら、私が貸してあげますから…」

それが彼女…天王洲アテネとの出会いだった

それからの日々は純粹に、楽しかった

そこでハヤテは執事スキルを身につけたただの

たくさん遊び、たくさん学び、たくさんキスもした

幸せだった

ただ隣にいただけで幸せだった

だが、終わりは無情にもやってきた

ハヤテは自身の親と決別すべく一度アテネの城の外へと歩を進めた

そして知り合った女の子から福引き券をもらった

しかし運のない自分では数回の挑戦で当たらないことなどわかりきっている

だからハヤテは様々な人のお手伝いをして福引き券を分けてもらうことにしたのだ

当時の大人からは、他愛のないお使いに見えていただろう

だが当時のハヤテは本当に真剣だった

ただ信じた未来の為に

そしてハヤテは見事福引きで、指輪を当ててすることに成功した

ハヤテは喜びアテネの待つ城へと戻り、指輪を渡した

それがただ純粋な、愛の証

だがその指輪はまだ子供だったハヤテとアテネには大きすぎた

おまけに愛の証なら二つ必要とダメ出しも受けた

それを見かねたアテネは受け取った指輪を大切に仕舞い、宝石が埋め込まれた指輪を差し出した

「いつかこれを二人ではめられる大人に、一緒になりましょうね」

その言葉がただ嬉しかった

そして自分が変わったように、あの親も変えられるハズだ、と感じたハヤテは両親にその事を話すべく、また城を出た

振り返った彼女の顔が、どこか不安そうなのを見ながら

また外に出た

今度はあっさり両親を見つけた

そして変えようと言葉をぶつける

「あんなことは泥棒だ、ダメに決まっている」

その言葉に返ってきた返答は

「そっかー、あれは泥棒だったか。父さんすっかりしてたよー」

今考えればなんだそれは、と思う

そんなのは一般常識だ

知らない訳がない…！

だが当時のハヤテはなんの疑問を抱かなかった

ふと唐突に

「ハヤテくん、その高そうな指輪はなんだい？」

父が聞く

ハヤテは大切な人にもらった大事な指輪だと返答した

それがいけなかったかもしれない

「お父さんが特別な場所で預かってあげるよ」

そんな言葉を信じ切ったハヤテはなんのためらいなく指輪を預けてしまった

それが引き金

喜び勇んで戻ったハヤテはアテネに言った

一緒に住もう、と

だが返ってきた言葉は一言

「行きませんわ」

その一言

…そして、決別の一言

それからただ罵られ、罵倒しての喧嘩だ

ただおかしいと感じたのは、アテネの背後に『何かいる』という
とだけで…

夜の街の中

綾崎ハヤテは一人歩く

（彼女は、僕のことを覚えてくれているのだろうか）

あんなひどいことを言って

ひどい別れ方をした

（仮に覚えていたとして、何を話せばいいのだろう）

僕の事を覚えているのなら、彼女はきっと僕を恨んでいるだろう

正しかったのは彼女で、間違っていたのは僕だからだ

そう、僕が裏切って傷つけた

言わなくちゃいけないことがある

別れた日、伝えられなかった大切な言葉を

いつか本当に、彼女にもう一度会ったなら

考え事をしながら歩いていたハヤテはとある庭に足を踏み入れていたことに気づくことができなかった

草を踏みしめ歩を進める

（僕は…彼女に――）

顔を上げた

瞬間、

心が大きく鼓動した

目の前に十年前別れた少女が佇んでいたから

身長も大きくなり、何よりも大人びて神秘的なその姿は…

天王洲：アテネ

チャプター10（前書き）

Dearest ～千年経っても覚えてる～

チャプター10

一目見るだけでわかる

一目で、君だと

「あ…」

何かを言わなくてはと思った

何か…

『いつかこれをはめられる大人に…一緒になりましょうね』

何を…？

君に言えば…

「花畑に迷い込むクセでもあるのかしら」

アテネが言った

風も強く吹きすさぶ

三日月が映えるこの空の下

ハヤテが聞いたのはそんな一言だった

「…え？」

「ですが残念…。門が開いていたとはいえここは私の家の庭…」

アテネは首だけを軽くハヤテに向けて

「どこの誰かは存じませんが、早々に立ち去りなさい」

冷酷に言い放った

「あ…」

ハヤテの事がわかっていないのだろうか

だからハヤテは名乗り出る

「ち、違つよ、僕だよ！ 綾崎ハヤテだよ！」

「ですから」

バツ！ と扇子を開き

「どこの誰かは知らない、と言っているのが聞こえなかったのですか？」

あくまでも悠然に彼女は言う

かつての面影そのまま

その一言で、ハヤテは水に顔をつけられたような気分になった

そうだ、何を舞い上がっていたのだ

この人がアテネという保証などどこにもない――

「アテネ！」

別の声が聞こえた

アテネの背後からハヤテと似たような執事服を身に包んだ男性が現れた

銀髪で短髪な男性だ

「夜中に出てったと思ったら…、庭先で何をしてるんだ」

「マキナ…」

しかしハヤテは男性が言った名前を聞き逃さなかった

（アテネ…？ 今、この人アテネって…！）

つまり目の前にいる彼女は――

「あ、あのだから僕は――」

その台詞は最後まで続かなかった

何故ならば

マキナの放った駿足の蹴りがハヤテに直撃したからだ

ドガア！！ と鈍い音が庭に響く

「がは！」とハヤテは息を吐き出しながらゴロゴロと地面を転がる

「な…！？」

「なんだお前は。アテネに何か用か！？」

マキナと呼ばれた男性がハヤテを睨む

刃のような鋭い視線がハヤテを写す

その視線に悪寒を感じた

マズい、これは…！！

そう考え身構えかけた時

「お止めなさいマキナ。それではその子が死んでしまうわ」

アテネの声が制止した

有無を言わさぬ絶対的な力を纏った言葉だった

「まあそういう訳だから、貴方も勝手に人の家に入ってきてはダメよ。次に来たら…この程度ではすみませんよ」

そう告げたあと閉め出された

ガシャン！ と無情にも門も閉められた

「…僕のこと、覚えていない…」

そう言い聞かせる

よく考えればわかることだ

あれから十年も経っているのだ

思い返せば、あれはほんの短い出来事

ハヤテにとっては大きな出来事だったかもしれない

だが彼女にとってあの日々は、とるに足らない日々なんだ

もし忘れてるなら、あんな辛い出来事を思い出してもらうつ必要なんかないではないか

ずっとしまっておけばいい

ずっと、自分の中に…

「綾崎！」

そう悲観している時、一人の少年の声が耳に聞こえた

同城内

執事マキナが写真を見ながらアテネに言う

「なあ、さっきのヤツコイツだろ？ 王玉を持ってるっていう執事」

マキナはアテネがあ執事を逃がした事に不満のようだ

「なんで素直に帰しちゃったんだよ。あのまま奪っちゃえば…」

「少し黙りなさいマキナ」

アテネが言葉を止める

反論を許さないといった感じの声色で

「その話はもういいから…」

そしてボタン！ と扉が閉じられた

「…、」

マキナはただポカンとその様子を見守る事しかできなかった

「綾崎！」

声が聞こえた

「かがみね、さん…」

軽く息を切らした、白スーツに白いソフト帽を被った鏡祢アラタがそこにいた

「はあ…はあ…、やっと見つけたぞ綾崎。桂さんが心配してたぜ」

額に汗をかいている姿を見ると結構な距離を走り回って捜してくれたのかもしれない

「…すみません、ご迷惑をおかけして…」

「迷惑なもんか。友達だからな」

言って屈託のない笑みを浮かべた

本当にまどろみや穢れていない、純粋な笑顔

「…ありがとうございます」

ハヤテもそれに対して笑みで返す

だが先ほどの出来事もあったためか、どこかその表情は暗かった

「…綾崎？」

その表情を読み取ったのかアラタが聞いてくる

「どうした？ 何か悩み事とかあるなら聞かせて」

「あ、いえそんな…。大丈夫です」

ハヤテは即座に返す

この方は何の関係もない

そんな方に迷惑をかける訳にはいかない

「そか？ まあとりあえず桂さんとは戻ろうぜ。待ってると思うから」

「そう、ですね…はい」

多少落ち着きを取り戻したハヤテはアラタと共に来た道に戻っていく

ハヤテは一人、今日の出来事を心に仕舞い込みながら

「あ、ようやく帰ってきた！」

入り口付近まで歩いてくるとヒナギクの声が聞こえてきた

恐らくずっと外で待っていたのだろう

幸いにこの夜は寒いというより心地良い風が吹いていたからか風邪はひかなそうだ

…アラタが部屋から出た時は死ぬほど寒かったが

「全く…。急にいなくなったら心配するじゃない」

ぷんぷんとヒナギクがハヤテに怒っていた

「す、すみません…」

とハヤテは素直に謝る

なんだかよくいそうな二人だな、とアラタは考え、そしてふと疑問に思った事を聞いてみることにする

「そっぴや桂さん、さっき天王洲さんがどうとか言ってたけど、天王洲さんとはどういった関係なのさ」

「！」

ハヤテが目を見開いた

ただそんなハヤテに気づいてない二人は会話を続ける

「んー、そうね…。私は高校から白皇に入ったから、その時は天王洲さんのこと知らなかったのよ。白皇の理事長だって」

「理事長！？ と、なるとめちゃくちや頭良いんすか！？」

「ええそうよ。財産だつてもものすごいって聞いてたし」

…レベルが違いすぎる

アラタは苦笑いを浮かべるしかできなかった

「んで、入学して間もない頃、校内を散策してて…」

ヒナギクの回想が始まる

旧校舎のあたりかしら、

ふと視線をあげるともービックリするくらいキレイな人がいて、思わず見とれちゃって…

白皇ってすごいなー、こんなお人形みたいな子がいるんだー…て感心してたら…

視線が合ったの

そして

「新入生が私に何かご用？」

「へ！？ いや、あの、えつと…そのー…」

突然過ぎたから、私そのときスッゴクテンパっちゃって…思わず

「め、メアド交換しない？」

「桂さん失礼すぎない？」

率直に思った事をぶちまけた

「し！ 仕方ないじゃない！ 知らなかったんだから！」

そんなやりとりの中、ただ一人真剣な表情でハヤテは話を聞いている
そしてまたヒナギクが語り出す

けどそれが良かったのか、天王洲さんが微笑んで

「貴女、面白い方ね。だけどあいにく、そういうものは持っていないの。…それと初対面の人に何かお願いする時は、まず自分の名を名乗る方が良いのではなくて？」

普通に指摘されたから私は素直に謝って

「う…ごめんなさい、私は一年の桂ヒナギク。えと、あなたは…？」

って聞くと静かにこう言ったの

「アテネ。天王洲アテネ」

「アテネ？」

「この星で、最も偉大な女神の名前よ」

それでそこから少しずつ話すようになって、仲良くなって…
家庭環境とか、共感する事も多くて…

それで打ち解けていって…

「なかなかいい出会いだっただんな」

「ええ、仲良くなってみると知的な雰囲気が出ててね。…それで、
会ってから半年以上経って、互いによく話すようになって、天王洲
さんって呼ぶのもなんだか他人行儀だなんて思ったのよ」

「だからお互いに、なんていうか、フレンドリーな名前で呼び合っ
とかどうかしら？」

「フレンドリーな名前？ …ふうん、どんな可愛い名前でももらえるのかしら？」

「んー…可愛い名前、か…。あ、だったらアテネを略して

アーたん

て呼ぶのはどうかしら？」

「！」

「そしたら『もうその名前で呼んでいい人はいないんだ』って怒られて…」

「…アーたんて…」

そんな世間話みたいに話を交わす二人を尻目にハヤテは一人考え、そして一つの結論に達した

彼女は、天王洲アテネは、アーたんは

（覚えてる…！ 彼女は、僕を…！）

ヒナギクの話から推測するなら、彼女は十年前の出来事を覚えている
ならなぜさっき知らないと言われたのだろう

ハヤテの名前を忘れている？

いや、とハヤテはその考えを打ち消した

あれだけ頭が良いんだ、忘れるなんて有り得ない

つまり彼女はハヤテのことを覚えているにも関わらず

『どこの誰かは知らないと、そう言っているのが聞こえなかったのですか？』

ハヤテのことを知らないと

「…、」

つまり

(…僕の事が、本当に嫌いになったということ…)

アーたん…

ハヤテはただ、その名前を想うだけ

……

意外と大きくなってましたわね…

やはり写真と実際会ってみるのでは違いますわね

なんというか、成長したというか、たくましくなったというか

…あの日から十年、もう会う事はないと思っていました

ねえ、ハヤテ

あんなひどい別れ方をしなかったら、あなたはずっと、あのまま私
といっしょにいてくれたかしら

だけど、今あなたは…

私じゃない人と、いっしょに…

……

いや、今は後悔より、石を…！

翌日

「ふあ…、おはよう、千桜ちゃん」

朝、千桜が起きると舌っ足らずな海音の声が耳に入ってきた

ちなみに今いる場所はデンライナーの内部

ホテルなどの寝床が確保できなかったから、内部で寝るといふ手法を取ったのだ

運が悪いと、寝違える可能性が高いのだが

「おはよう、かいとくん。…早いねー」

「千桜さんに、朝ご飯作らないといけないですね」

「自分の分は？」

「ちゃんと作るよ、同時製作」

トントんと小刻みな音が聞こえる

朝食を作る海音を見て笑みを作りながら、時間を潰すために読者を始める

何気ないこの朝というのも嫌いではない

かはわからないが
台所から聞こえてくる包丁やガスの音

それを耳に入れながらまたページをめくる

（なんて、優雅…）

ああ、なんだかお嬢さまみたいだ

ナギのところの綾崎くんもこんな感じなのだろうか

「僕は執事じゃないですから、流石に…」

「！」

なんという絶妙なタイミングだ

「はい、スクランブルエッグと、焼いた食パン。…あともう少しで野菜スープができますから、待っててください」

ことり、と朝食を乗せたお盆をテーブルに置いて、気づいた

「…海音くん、その指どうしたんだ？」

乱暴に包帯が巻かれた指が気になった

「あ、これですか。…寝ぼけて包丁で野菜を切ってたら、うっかり切ってしまった…」

てへへ、とはにかんで笑顔を見せてくる

それを聞いた千桜はむっ、とした様子で

「ダメじゃないか、ちゃんと消毒しないと」

「え？ わわっ」

どうか、と座らせて包帯が巻かれた手を取る

部位は左手の人差し指だ

その包帯を解き、荷物に入っていた消毒液をティッシュに軽くつけて傷口に軽く当てる

「痛っ…!!」

「我慢して。もうちょっとだから」

一通り消毒を終えて今度はキレイな包帯を取り、海音の人差し指に巻いていく

先のところをハサミでちょきん、と切って二本のヒモを作りそれを結んで固定する

「はい、終わり」

チヨンと人差し指を突つつく

「あう…。…あ、ありがとうございます」

どことなく顔が赤い

お互いにこんな経験はないから、また会話が止まると

「あ、海音くんスー普！」

「へ？ … ああ！？ 忘れてた！！」

また一日が、始まる

同時刻

「今晚だっけ。ハヤテくんとディナー」

洗面所の会話にて

西沢が歯を磨こうとしてたヒナギクに言った

「……………、う、うん」

ヒナギクは軽く頬を赤らめ歯ブラシを口に入れシャコシャコと磨き始めた

「いいなー、私もハヤテくと素敵なディナーを試してみたいよー」

「けど一緒にご飯食べるだけよ。それ以上は、何も」

磨き終わってコップを手に取り水道に近づける

と

「これを機に告白とかはしないのかな」

ガラガラガッシャン！！ とヒナギクは盛大にコップを落としてし

まった

なんだか最近よくブツ飛んだ質問を受けるのは気のせいか

「…、あ…あのさ」

「ん？」

躊躇いがちにヒナギクが問いかけた

「私が本当にそういうことを伝えたとしたら、どう思う？」

「…どう思っつて。むー…、まあいろいろ考えちゃうけど、わかんないや」

返ってきたのはそんな言葉だった

「聖人君子ってワケじゃないからさ。嫉妬するかもしれないし、祝福できるかもしれない。けど、二人が付き合いだしたら、やっぱり泣いちゃうかも」

ヒナギクは無言で西沢の言葉を聞いていた

語り出す彼女はさばさばとして、どこことなく、笑顔が綺麗だ

「…けどさ、傷つけて、傷ついて…、誰かを好きになるって事は、そういう事なんじゃないかな」

ここはパルテノン神殿

パルテノン神殿はギリシャ古代建築を現代に伝える最も重要な、ドーリア式建造物の最高峰と見なされる。

装飾彫刻もギリシャ美術の傑作で、この神殿は古代ギリシャそして民主政アテナイの象徴であり、世界的な文化遺産として世界遺産に認定されているのだ

「同行しても本当に良かったんですか？」

躊躇いがちにアラタがマリアに聞いた

「大丈夫ですよ。こういうのは賑やかだと楽しいですし、ナギも割と…」

言ってマリアはナギを見る

そこには西沢と美琴と談笑しているナギがいた

ちなみに生徒会三人娘は夜更かししてたらしく、ホテルで現在爆睡中

ヒナギクは高所恐怖症のため、柱に手をついて一心不乱に神殿を絶賛見学中

ここにいるのはナギと西沢、ハヤテ、ヒナギクにマリア

それとアラタ、当麻、美琴と神那賀、紅司に咲良の二人組

伊達さんや他のメンバーは自由に観光中だ

お金持ちはスゴいなー、とアラタは感心していると、どんよりとしているハヤテが目に入った

これは朝からそうだった

やはり何か悩み事があるのだろうか

友達としては助けてやりたいが、自分が行動した事で悪化する可能性もなくはない

ここはしばらくは静観が正解か、と結論づけて

「綾崎、どうしたよ」

「ハヤテ、朝から調子でも悪そうだけど、大丈夫か？」

タイミング良くナギもハヤテに聞いた

「い、いえ！ 心配には及びませんよ！ 世界遺産とか見たの初めてでしたから、ビックリし過ぎてボーっとしちゃいましたよー」

そう笑顔を作るが、どこか無理をしてるように見えたのは気のせいか

「けどそれだとこの先驚きすぎて気絶しちゃうかもだぞ」

「へ？」

言うや否やバラバラバラ！ と中空に現れしはヘリコプター

割と大きく、この人数でも難なく乗り込めるだろう

ただ何人かは呆然としていた

代表として西沢が思う

（あ、侮っていた！！ お金の量がケタ違いすぎる！！）

まさしく月とすっぽん

天と地だ

「あれ、けどこれ…桂さんは大丈夫なの？」

ふと思った疑問を美琴が言った

「もう固まってるけど…」

神那賀が指差すとそこには作り笑顔で額に脂汗を浮かべたヒナギクが石みたいに固まっていた

メドゥーサに睨まれたみたいに

「…んー」

ナギはちよつと考えたが

「ビックリし過ぎると気絶するから問題ない」

「——！！」

固まったヒナギクを乗せてヘリコプターは発射しました

まだまだ受難は続く

男はドアを開いた

差し込んでくるのは太陽の光

男は首にかけられたトイカメラで適当に街を撮った

「…世界つてのは、まだまだあるな。ここの景色は、どこか悲しい」

男は再びカメラをぶら下げ直す

そして男は誰にともなく呟いた

「神の名を持つ島、か。…ま、なんとかなるだろう」

呟いた後、男――門矢士は歩き始めた

チャプター10（後書き）

アラタ「アラタと！」

ハヤテ「ハヤテの！」

『執事通信』！！』

アラタ「てか俺執事じゃないんだけど、このコーナー来ていいのかな」

ハヤテ「いえいえ、大歓迎ですよ！ 鏡祢さん！」

アラタ「つーかあとがきコーナーなんてやらないのに、なにさ今更この作者は」

ハヤテ「何でも、他の作者さまを見習おうって事になって…」

アラタ「ホント今更だなオイ」

ハヤテ「そんな事仰らないくださいよ、めったにない二人でのコーナーですよ？」

アラタ「まあ」とある」と「ハヤテ」だからね…。さて綾崎、次回
は？」

ハヤテ「はい！ 次回は主に、ヒナギクさんが気絶しそうですね…」

アラタ「最後に出てきた男や、綾崎と桂さんのディナーと気になる
ところ満載、かな。…まあいいや」

ハヤテ「いいんですか！？ あ、えと、次回も、この番組（？）に
！」

アラタ「スイッチ、オン！！」

チャプター11（前書き）

そして彼女は決意する

チャプター11

「うおー！！　ここがデルフィ遺跡かー！！」

現在我々がいる場所はデルフィ遺跡と呼ばれる世界遺産だ

因みに叫んでいるのはテンションが上がっている西沢歩

「さすが太陽神アポロンの神域！！　空も晴れ渡るブルースカイ！！」

大空を仰ぎ見ながら高らかに叫ぶ

「ねえねえ見てよヒナさん！！　ここがかつて大地のヘソと呼ばれた、世界の中心だった場所だよー！！」

と、言われたヒナギクは

「へりなんかなくなっちゃえばいいんだへりなんかなくなっちゃえばいいんだへりなんかなくなっちゃえばいいんだへりなんかなくなっちゃえばいいんだ……」

「世界の中心でへりを呪った会長！？」

恐らく地球上で初だろう

「ちょ、大丈夫かなヒナさん！！」

「あ……、サンドイッチ食べます？」

思わずあたふたし、気を使う西沢

美琴もサンドイッチを手に持ってヒナギクに促してみる

「ええ、とりあえずヘリが落ちなかったから大丈夫よ」

若干顔が青いままヒナギクが応えた

「だ、大丈夫だよ桂さん。落ちる確率は天文学的だからさ」

アラタ必死のフォロー

「ヘリが地面を走ってくれたら信用してあげるわ」

「そんなヘリ、逆に信用できねーよ」

どこまで嫌いなんだ高いところが

と、ヘリの値段が気になったようで、西沢がマリアに問いかけてみた

値段は無論気になる

アラタや当麻はガツツリ聞く気満々で言葉を待つ

「改良費も含めて、ざっと三十億円ですわ」

啞然としたのは言うまでもない

「……やー、すごいな綾崎」

逃避するべく当麻と二人してハヤテに話を振る

「…、」

「綾崎？」

本当に様子がおかしい

何か、思い詰めた表情だった

「お嬢様はいつだってすごいですよ…」

その様子を主であるナギは見つめていた

何かを感じていたような視線をおくりながら

「けど私！！ もうへりなんか乗りませんからねっ！！」

さて次の場所へ行こうかなんて時にヒナギクがキツと睨んだ

「じゃあどうやって行くんですか」

当麻が代表して何故かを問うた

「走ってく」

「…えー」

もう何も言えなかった

するとナギが軽く息を吐きながら

「心配しなくてもへりにはもう帰ってもらったよ」

と言った

「え？」

へりには帰ってもらった？

「いくら速いとはいえ、ローター音が耳障りで仕方がない。それに…」

とヒナギクに顔を向けて軽く笑みを浮かべながら

「それに、乗り慣れていないとやはり怖いのは確かだと思うんだ。私は」

「…。ナギ…」

ここまで考えていてくれたなんて

生まれて初めてこの友人が天使に見えた

「だからここから先は、ジェット機でいく」

「……」

天使の顔した悪魔だった

ヒナギク本日二度目の気絶

アテネ市

市街を歩く二人組の男性と三人の女子中学生

「佐天さん佐天さん！ これ見てください！」

「お、なににに！？ ……うわぁ…、可愛いネックレス…」

お店のガラスに手をつけて瞳をキラキラさせているのは初春飾利と
佐天涙子

二人とも学園都市の中学校に通う女の子だ

「…貴女たち、遊びに来たのではないんですわよ」

その二人をジト目で見る女の子は白井黒子

「まあ今日くらい多めに見てあげてよ。せつかくの海外なんだから」

「ああそうだぜ。ピリピリしてるのも疲れるしな」

そう言って宿めるのは二人組の探偵コンビ、左翔太郎とフィリップ

現在は学園都市に場所を移し、第二左探偵事務所を開業している

「にしても、全然いねーな。結構歩いたと思ったんだけど…」

「確かにね。流石に、居場所は検索できないからね…」

言っただけでフィリップはクロワッサンに噛みついた

「ておいフィリップ、お前までなに食ってたんだ」

「いや、ちょっとお腹が減って。だけど翔太郎、クロワッサンってなかなかだね。ここがリボルギヤリー内なら検索してしまえそうだ」

「…外に出てて助かったぜ…」

フィリップは疑問に思った事を気の済むまで徹底的に調べ上げる「クセ」がある

一度こうなってしまうと調べ尽くすまで止まらない

翔太郎も何度手を焼かされたか

「ほら貴女たち、そろそろ行きますわよ!」

「あ、待ってくださいよ白井さん」

「あ、初春、私を置いてくなっ」

「おい！ 勝手に前に行くな！ 迷子になっちまう――」

「ふむ…、実に興味深い。帰国したら早速検索だ」

「ああくそ！ フィリップお前もか！」

なんで偶然クロワッサンなんか購入したのだろう

翔太郎の不運は続く

綾崎ハヤテの元気がない

断崖の修道院「メテオラ」についたところで西沢が心配そうな表情で言った

「…ハヤテくん、ちょっと元気ないかも」

「そうですわねー…」

西沢の横で同じように心配そうな顔でマリアが続く

「けど昨日は普通だったよな」

「ああ。全くだ」

少し離れた所でアラタと当麻が言葉を挟む

「だったら、私の飛行機みたいにこのあと憂鬱になるような事があ

るんじゃない？」

それは貴女だけだよ、という言葉のアラタは飲み込んで

「流石にそんな…」

「じゃあこのあとなにかあるの？」

「んー、強いてあげるなら…桂さんとディナーとか」

沈黙する一同

「…あれ」

ヤバい、変なこと言った

アラタは頭の中で整理する

しかしそんなアラタとは裏腹に割と本気で受け取ったヒナギクは

「え、ま、まさか…、私のせい？」

めちゃくちゃショックを受けておられました

「いやいや！ そんなことないよ桂さん！」

「そうだよ！ 流石にそれはないよ！」

神那賀と美琴が必死にフォローー

「仮にそれが原因だとしても、そこまで憂鬱に…」

当麻も当麻なりにフォローするのだが

「そこまで憂鬱になるほどイヤとか…」

通じず

「わかりました！ では私が、詳しくハヤテくん理由を聞いてきますわー！」

メイドさん出陣

「ハヤテくん！」

不意に声をかけられた

マリアの声だ

「あ、はい…。なんですかマリアさん」

「ハヤテくん、さっきから何をそんなに憂鬱そうな顔しているんですか？」

「え？ や、やだなあ。そんな顔してませんよ」

「もしかして、その…」

と言った時流石に『ヒナギクさんとのディナーが憂鬱なんですか？』
なんて聞ける訳がないので

「あの、マリアさん？」

「で、ですからその…！」

だからマリアはこう聞いた

「そのくもった表情は…、「夜の出来事」と関係があるんですか？」

なんかこう聞くとどこことなく卑猥に聞こえるが、マリアは今晚のディナーの件を言っているのだが

「夜の、出来事…？」

この時ハヤテと周囲にある勘違いが生まれた

マリアは夜の出来事をヒナギクとのディナーと捉えて言ってるのだが、ハヤテには昨晚アテネと会話した事と捉えた

早い話、マリアは「今晚」の夜の出来事。ハヤテは「昨晚」の夜の出来事と綺麗にすれ違いができてしまった

そんなこととはつゆ知らず

「…まあ確かにそうですね…」

どこかから「ピキィ！！」とひび割れるような擬音が聞こえたが無

視する

「た、確かにつて…?」

「…詳しくはお話しできませんけど、明らかに自分の事が嫌いだとわかれば、どうしていいかわかんなくなるっていうか…」

「明らかに、嫌い…?」

キューピン！ と MARIA がひらめく

（はっはーん。これはまたいつもの、ハヤテくんお得意の勘違いってヤツですわね）

余談だが MARIA さんも勘違いしています

（仕方ないですねー…ではここは私が、やんわり大人のアドバイスをしてあげますわ）

そうと決まれば

「ハヤテくん」

「あ、はい」

「とりあえずいい機会ですし、今晚ヒナギクさんとじっくり話をしてみてはどうですか?」

「え…? ヒナギクさんと?」

ハヤテは頭に何個かハテナマークを浮かべた

「なにかあったかわかりませんが、言葉にしてみないとわからないじゃないですか。人と人との関係は、何かと誤解はつきもの…」

言ってマリアは笑みを浮かべて続きを言う

「でも誤解を恐れていては、人と人との関係は永久に何も変わりませんわ」

「…、」

勘違いから生まれた会話だがなんかしらハヤテには伝わったらしい

「それに大事なのは、ハヤテくんがどうしたいかですよ。ハヤテくんはどうしたいですか？」

「僕が、どうしたいか…」

数瞬の間あとハヤテは言った

「わかりました。じゃあ少しヒナギクさんと話してみます」

「ええ、きっとそんな深刻な問題ではないと思いますわ」

直後のマリアさんの心境

（決まったー！！ どうですかこの大人の対応！！ さすがですわ私！！）

さすがです

「…私との食事がそんなに憂鬱だったなんて…」

桂ヒナギクは岩に手をつけてずーんと落ち込んでいた

全て勘違いだが

「いやいやそんな。ハヤテくんお得意の勘違いなんじゃないかな」

汗を浮かべながら西沢が必死にフォローする

「綾崎さんいつもあんななの…?」

怪訝に思った美琴が西沢に聞いてみた

「うん、割と…」

苦笑いで西沢は答える

勘違いで空回り、最後に真相を知り苦笑い

似たようなのが何個もあった

「御坂、さん」

「は、はい」

不意に呼ばれてちょっとびくつとした

「想いつて、言葉にしないと伝わらないって、言ってたよね」

「う、うん」

「…なら、言つてあげるわ…。あの人に…！」

バッ！ と顔を上げて宣言する

「はつきり！！ 気持ちを…！！」

そして彼女は決意する

鈍感なあの人に、自分の気持ちを言葉にしようと

「…、」

ただ一人、アラタはどこか考えるような表情で

「アラタさん？ どうしたんです？」

ふと隣に歩いてきた紅司と咲良が聞いてきた

「どこか調子が悪いんですか…？」

「あ、いや…そんなじゃないよ。…何でもないんだ」

そう言つて二人の頭を撫でるアラタ

(…、)

アラタは昨日の夜を思い出す

思えば昨日はどこか大きめの門の前でハヤテと合流した

先ほどマリアが「夜の出来事」と遠回しにハヤテに聞いていたが…

もしもその出来事が昨晚の事だとしたら？

確かにハヤテは（自分が言うのも何だが）他人の好意には鈍そうだ

いや、実際西沢やヒナギクの意見からまとめるに鈍いのだろう

だからといってハヤテがヒナギクを憂鬱に思ったりするだろうか

つまりハヤテのあの憂鬱の原因は今晚ではなくて昨晚から引きずっていたのか

(…割と苦労人だな、綾崎は)

おそらくハヤテはえらくモテているだろう

しかし本人は女の子たちの好意に気づいていない

それになぜだかタイミングが悪い（色々と）

そして三千院家の執事をやって…

（なんだろう、早死にしそうだ綾崎）

負の想像

…大丈夫だろうか綾崎

そう思いながら今日は過ぎていく

チャプター11（後書き）

美琴「美琴と!!」

ナギ「ナギの!!」

『執事通信』!!』

美琴「執事通信も二回目。てことで今回は原作と、作者の作品と口イン、御坂美琴と」

ナギ「三千院ナギがお送りするぞ!」

美琴「まあ二回目といっても特にテーマはないのだけど」

ナギ「それは番組としてどうなのだ…。それにテーマならあるではないか」

美琴「? なによテーマって」

ナギ「それは…」

美琴「それは?」

ナギ「お前の彼氏、アラタだアアあ!」

美琴「にゃ!?! にゃに言うのよナギさん!?! / / /」

ナギ「気にもなるわ！ 見えない所でイチャイチャしおって！！
私、だって…」

美琴「え、えと…、あのアラタとは確かに恋人、だけど…え、と。
あの…／／／」

………

アラタ「もう收拾つかん。綾崎、次回予告」

ハヤテ「はい。今回は、僕とヒナギクさんがついにディナーをします…」

アラタ「門矢士も動くらしいな…。…黒子たちも…」

ハヤテ「なんで露骨に嫌そうな顔なんですか？」

アラタ「いや、別に…」

ハヤテ「と、とにかく次回もこの番組に！！」

アラタ「シンメトリカル！ ドッキングッ！」

ハヤテ「何人に伝わりますかね、そのネタ…」

チャプター12（前書き）

S i l k y h e a r t 言葉にならない

チャプター12

「千桜さん？」

ここは千桜と海音が宿泊しているホテル

時刻は夜、だいたいディナー時といった時間帯か

ちなみになぜ最初の言葉が疑問系だったのは千桜が携帯の画面を凝視していたからだ

「どうしたの？」

「あ、いや…。三人娘、いるだろ？」

三人娘とは、瀬川泉、花菱美希、朝風理沙の三人だ

「はい。その三人がどうしました？」

「いや…。瀬川さんからメールきてさ。まあ純粹に明日皆でショッピングに行こうってメールなんだけど」

皆でショッピング…

「いいじゃないですか！ 皆でショッピング！ なんだかんだでハヤテくん達とあんまり絡んでないし！」

「その発言はどうかと思うぞ海音くん。…それにショッピングといつても…」

むう、と千桜は考え込む仕草を見せて

「…ほとんど今日の午前中に済ませちゃったんだけど…」

そうなのだ

本日の午前

朝起きてご飯を食べて、両親へのお土産や欲しいアクセなどはほぼ購入してしまった

お互いのネックレスを交換した時は頬が紅潮したほどだ…

「それでも友達と一緒に買い物って、楽しいと思いますよ。もう日にちもないですし、…ね？」

言われてみるともうゴールデンウィークも残り少ない

恐らく明日が最後、明後日には帰国といった感じだ

「…そうだね。行こうか。買い物に」

千桜が言うとはあ、と海音が笑顔になる

その笑顔にちょっとだけ千桜がときめいたのは言うまでもない

と、幸せムードな二人にコンコン、とノックの音が入ってきた

「入るぞー」

そして有無を言わず乗り込んできた一人の男性

黒めの上着に黒ズボン、内側に赤いＴシャツを着て首には縦長に二つレンズがついたトイカメラ

門矢士だ

「やっと見つけたと思ったら。何イチャついてんだお前」

「べ！ 別にイチャついていたわけじゃ…！」

「真っ赤な顔で言われても説得力ねーよ。ま、いいけどな」

言いながらあくまで自然な動作で部屋の椅子をひき、どつかと腰を下ろした

「ていうか。貴方は誰ですか。いきなり入ってきたと思ったら普通に座って…」

いきなり来訪してきた士にちよっぴり怒りを現す千桜

まあ当然だ

「待つて千桜さん。あの人は僕の知り合いだよ…」

「あんな礼儀知らずな方が？」

「う…。確かに礼儀知らずだけど…」

「そこ！　ちよつとは否定してくれ！」

椅子の上で声を荒げる

「だってそうじゃないですか。いつも自信満々だし偉そうだし」

まるでギルガ。ツシュだ

「そこまでえばるか。「我」と書いて「オレ」みたいな慢心王と一緒にするな」

下手をすればその慢心王さえぶっ飛ばしそうだ

まあそんなワケで

「どんなワケですか」

メンバーが一人増えました

「今頃桂さんは、綾崎さんとディナーかー」

アテネ市市街の夜道を美琴と歩く

ナギの別荘には当麻と神那賀、紅司くん、咲良ちゃんがお留守番している

なぜ留守番しているかと言うと、ナギとマリアが西沢を連れてギリシャ最大の博物館、国立考古学博物館に行ったからだ

ナギ曰わくお礼らしいが

「デイナーかー…」

なんだか美琴がジッとこちらの顔を伺っている

「…どうした美琴」

また俺はなにかやらかしてしまったのか、とアラタが思考をフル回転し、様々な事象を想像していると

「デイナーに行きたいアラタ」

「…。晩御飯なら三千院の所で食べたじゃんか」

「学園都市に帰ったら、の話よ。…なんだかんだで邪魔や急な用事入ったりで…結局デイナーには行ってないじゃない」

言われてみるとそうだ

何度か夕食を約束したのだが、その度急用や邪魔が入るのだ

呪われてるのか、と考えたほどだ

「…そうだな。ちょうど行きたいと思ってたんだ。…二人っきりで」

ソフト帽を右手人差し指で軽く上げながら美琴を見る

「…アラタ」

頬を赤くしながら期待の目線でアラタを見つめ返す

なんてイイ雰囲気

このままいけるか…、と思いかけた瞬間

「お姉様アア！！ お兄様アア！！」

「なあ美琴。…いまイヤな後輩の声が聞こえた気がするんだが」

こめかみをひくつかせ美琴が続ける

「き、聞き間違いじゃないかしら」

聞き間違いであって欲しいという願望も込めた一言でもあった

と次の瞬間美琴とアラタの間にツインテールの女子が突如として現れた

しかもそのツインテールは二人がよく知る人物で

『ふん』

息のあった張り手がツインテールの頭にクリーンヒットする

「なばっ」

妙な呻きをあげてツインテールが地面に突っ伏した

そのタイミングを見計らって美琴が叫ぶ

「黒子あー!!」

突っ伏したツインテールは美琴の後輩、「白井黒子」だ

「御坂さーん、アラタさーん」

また横合いから別の声が聞こえてきた

声がした方を見ると頭に花飾りをした女の子と、黒髪ロングの女の子…、そしてその後ろに二人の保護者みたいなの…

「初春に佐天…。左のダンナにフィリップまで…」

ほぼフルメンバーではないか

「よ、捜すのにちょっと手間取ったぜ」

なんて気楽に答えるのは黒いソフト帽に着くずしたスーツを着込んだ男性は左翔太郎

その隣にいるのが彼の相棒のフィリップだ

「なんで初春さんたちもここに？」

最もな疑問を美琴が投げかける

「僕たちは、ここに逃げ込んだドーパントを追ってきたんだ」

「ドーパント…!？」

「ああ」とフィリップが頷いて翔太郎が言葉を続ける

「実はここ最近、学園都市で奇妙な事件が相次いで起こってるんだ」

「奇妙な事件？」

初耳だ

「それは、人が金にされるっていう事件だ」

「人が、金に？」

なんとオカルトじみた事件か

「メモリの名前は？」

「もう検索は終わっている。メモリの名前は、「ミダス」。かつてフリギアの王として君臨していた者だ。その力は、触れたモノをすべて金に変えるというものだ」

「触れたモノって、人間や、物さえ金にするってのか!？」

それは恐ろしい力じゃないか

触れられるモノなんてたくさんある

もし攻撃さえも防がれるなら無敵だろう

「だが、攻撃関連は金にするのは難しいみたいだ。神経を集中するからね。だから波状ならなんとか倒せるかも。…協力してくれるかい、アラタ」

「たり前だろ。場所は？」

そう聞くと翔太郎が軽く額に汗を浮かべて

「…見つかんねーんだよ。だから、散歩がてらいろんな所搜したんだけど、収穫はナシ。今日は休もって話になったんだが、いい宿がなくてな…」

うーん、と翔太郎が唸る

「あ、それだったら…」

アラタは一つ思い浮かんだ場所があった

そこに翔太郎たちを誘ってみよう

アラタは未だぶっ倒れてる黒子を担ぐとその場所へと案内すべく、歩きだした

まあその場所とは、いま自分たちが宿泊している三千院の別荘なのだが

私は、この人が

綾崎ハヤテという人が好きだ

だから気持ちを…伝えようと思ったんだ…

一通り食べ終えてレンゲをお皿の上に置く

「前菜の味はいかがでしたか？ ヒナギクさん」

カチャ、と皿とレンゲを回収しながらハヤテが問う

ヒナギクは先ほど食べた前菜の味を思い出すように、口元を拭いながら

「とってもおいしかったわ、ハヤテくん」

「それは良かったです」

言って柔和な笑顔を浮かべる

この人がヒナギクの好きな人、綾崎ハヤテ

「だけど…、ディナーっていうから私でつきり、ハヤテくんと一緒に食事をするのかと思ったら…。ハヤテくんがずっと給仕をやるのね？」

「はは、そりゃ僕は執事ですから」

ハヤテは次の料理を用事しながら答える

そして軽くヒナギクの方を向きながら

「それにこれは、ヒナギクさんへのお礼のディナーなんですから」

ハヤテは何気なく普通に言っ たつもりだろう

純粋な微笑みがとてつもなく眩しく見えて…ヒナギクはきゅんっとなってしまった

そう、確かに料理は美味しいのだ

「では次はスープですが…」

「あ、うん…」

だがヒナギクは、料理を食べるためにここに来た訳ではない

（私は…、このディナーをキツカケに好きという気持ちを伝えるために来たのだ！）

しかしいざ言うとなると…

「それで、このスープは地中海でとれた魚を…」

ハヤテの説明なんて耳に入ってこなかった

なぜならいつ、いつたい、どんなタイミングで『好き』だと言え
ばいいのかわからないからだ

（ああもうどうしたらいいのよ！！　このままじゃせつかくのデ
ィナーがあつという間に終わっちゃう！）

おそらくこのタイミングを逃せば一生告白なんて不可能だ

ならばいつそのこと勢いで言ってしまえ、と考えたヒナギクは

「は！　ハヤテくん！！」

「はい？　どうしましたヒナギクさん」

自然な笑みにヒナギクはまた顔が赤くなり…

「…お水、もらえるかしら…」

全く違う言葉を口走っていた

（もー！　どうしたらいいのよー！　バカああああアア！！）

結局、何も言えないままディナーは終わってしまった

あとはこのまま、帰っておわり

だけどそれでいいのだろうか

いまヒナギクはハヤテの数歩後ろを歩いている

このまま終わったら、きっと必ず後悔する

だから聞こう

せめて、これだけは

「…ねえ、ハヤテくん」

「はい？」

ヒナギクは一度立ち止まって声をかける

ハヤテもあわせて立ち止まった

そしてヒナギクは意を決して、問いかけた

「今日ずっと、憂鬱そうな顔してたのは、どうして？」

その問いかけに、ハヤテは一瞬ドキリとした

「…え？」

「…その理由を全部、聞かせてくれない？」

「憂鬱そうな…顔？」

「ええ、理由…あるんでしょう？」

上手く隠したつもりだったのだが、やはり顔にはでていたようだ

自分が、天王洲アテネの事を気にしていた事が

「…すみません。出来るだけ表情には出ないように努力はしていたのですが…」

「…そう。じゃあ…、やつぱり…」

「昨日、天王洲さんと久しぶりに会ったんですよ」

「え…？ 天王洲さん？」

ハヤテの口から意外な人の名前を聞いた

「会ったのは偶然なんですけど…。僕は彼女に言わなくちゃならぬ事がたくさんあって、少し話そうと思ったんですが…、無視、されてしまっ」

つまり…ハヤテの憂鬱そうな表情はそれが原因なのか

となると決してヒナギクとのディナーが憂鬱だった訳ではないのだ

（…良かった。少し安心したじゃない…）

心から安堵した

そして別の疑問が浮かび上がってくる

「けど、ハヤテくん天王洲さんと何があったの？」

好奇心から出た質問だ

おそらくは昔なにかの縁で知り合ったとか、他愛ない関係かな、と思っただ

「その…、ハヤテちゃんと天王洲さんっていったいどういう関係なの？」

「…どういう関係…って…」

そう聞かれると返答に困る

ハヤテとアテネ

いったいどういう関係だろう

幼なじみ…いや違う

友達…無視されたのに

考えてみると上手い説明が見つからない

せっかくマリアが『ヒナギクに相談してみては』とアドバイスをくれたのに

「あの人…」

自分を助けてくれて

たくさんのことを教えてくれて

傷つけてしまった人

再会するのに十年流れて

再び会ったら嫌われて

もう自分なんか忘れてしまおうとしている人…

『大事なのはハヤテくんがどうしたいかですよ』

…何かしら、この沈黙

私になにか変なこと聞いちゃったかしら…

いや、けどこれはいいタイミングじゃないかしら

そうだ、このまま終わったら何のために決心したのかわからない！

ハヤテくんの曇った顔だけ見て勝手に自分で勘違いして

落ち込んだりへこんだり、もうそんなのイヤなのよ！！

だから言うんだ！ この人に、好きだって！！

僕がどうしたいのか

僕にとって、自分にとって天王洲アテネはいつたいどんな存在だ

ハヤテはずっと彼女の影を追いかけていた

それは何故？

贖罪？ 謝罪？

アテネを傷つけた事をハヤテはずっと気にしていた

だけどそれだけか？

だから気になってた？

だから会いたかった？

いた違う、そんなのじゃない

ハヤテと、アテネは

（僕と、彼女の関係は…）

『いつか、これを二人ではめられる大人に、一緒になりましょうね』

他の人とは、違う

綾崎ハヤテにとって

（僕にとって…）

天王洲アテネは…

（彼女は——）

「左手くらいなら、私が貸してあげますから」

たった、今

綾崎ハヤテは理解した

自分にとって、彼女はどんな存在かを

「あ！ あのねハヤテくん！！」

「彼女は…」

「ずっと、言わなかったけど、私…！！」

「あの人は…」

「ハヤテくんのごことが…！！」

「あの人は僕の…好きな人です」

世界が止まった

風が吹き荒れた

彼女は、ヒナギクはなんて言おうとしたのだろう

それがどんな言葉だったのか

もう、思い出せなかった

チャプター12（後書き）

ハヤテ「ハヤテと！」

アラタ「アラタの！」

『執事通信』！！』

アラタ「なんてやってる場合じゃねえだろコラ」

ハヤテ「いえいえ、このコーナーも三回目なんですから、明るくいきましようよ明るく」

アラタ「明るく行けるかアアア！！ 今回の終わりが終わりだから明るくなんて出来ねエンだよオ！！」

ハヤテ「キャラが変わってます鏡祢さん！！」

アラタ「キャラが変わっちゃうくらい気が動転してるのさしてるんですしてるんだよ三段活用！！ 次回どうなんだよこれ！！」

ハヤテ「で、ではまた次回」

アラタ「流したなハヤテエエ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0772x/>

劇場版とある魔術の禁書目録～戦いの神と呼ばれた者～×時間を渡る電王《王

2011年11月15日02時27分発行